ドーピング問題の現状と課題

体育科学コース　福　島（太田）美　穂
体育科学コース　武　藤　芳　照
体育科学コース　青　木　秀　憲

The Present Situation and Future of Doping Problem

Miho FUKUSHIMA－OHTA
Yoshiteru MUTOH
Hidenori AOKI

When looking back into the history of doping, we realize that the illegal use of performance enhancing drugs has spread over the world rapidly over the last 10 years, and has become more complex, cunning and even organized.

To fight the spread of such drugs, the doping control procedures are required to be more effective, by increasing the number of testing laboratories and improving the methods of testing. It shall also be effective to increase the number of out-of-competition tests and to conduct tests at each federation. However, not to mention names like Ben Johnson, Katrin Krabbe or the 7 Chinese swimmers at the '94 Asian Games, the cases of doping has spread widely around the globe. An effective method for doping control is essential.

Doping control is necessary for recognizing and proving that the records were established in a fair manner. It must be recognized that the use of such drugs will destruct the competitor's health and the fairness of the sport itself. It will also be a disgrace to the values and the faith in the world of sports.

Finally, the authors believe it is very important that all of those who get involved in sports realize this, and we shall always keep sending this message to them.

目　　次

1．はじめに
2．ドーピング小史
　A．「ドーピング」の語源
　B．ドーピングに伴う事故
　C．ドーピング・コントロール
3．ドーピングの実態
　A．IOC公認検査機関でのドーピング検査陽性例
　B．水泳におけるドーピング事例
4．ベン・ジョンソンのドーピング事件
5．カトリン・クラッベのドーピング事件
6．中国選手の大量ドーピング事件
7．ドーピング問題の課題

1．はじめに

1995（平成7）年9月19日の朝，新聞，テレビ，ラジオは，「(95'ユニバーシアード福岡大会で）中国選手がドーピング」という事件を大きく取り扱って報道した。中国は，1994（平成6）年の広島アジア大会でも，11名の選手が，いわゆる筋肉増強剤の男性ホルモンの一種を使用していたことが発覚して，処分を受けたばかりであったため，世界の注目を再び浴びる結果となった。

スポーツ選手が，より強くなりたい，よりよい成績をあげたいという欲求を抱くのは，きわめて当然である。そのために，ひたむきな練習と，トレーニングを積み重ねる。そうして初めて得られる勝利と成功であるからこそ，自身の喜びと感激は大きく，また，見る者にも深い感動を与えるものである。

しかし，勝利と成功の「近道」のために，様々な不正とルール違反が行われてきたことも事実である。ドーピングはいわば「化学的近道」として，選手・コーチらに用いられた不正手段である。

多くの科学者，医師，スポーツ関係者が，ドーピングをなくすために，懸命の努力を続けているにもかかわらず，冒頭のような事例は枚挙にいとまがない。

そこで，本稿では，スポーツにおけるドーピング問題の現状について分析し，近年発生した主要な3つのドーピング事件の経緯を探り，それらを基盤にし，ドーピング問題の将来的課題を論考しようとするものである。

2．ドーピング小史

A.「ドーピング」の語源

ドーピング（doping）という語源は，南アフリカ共和国の原住民カフィール族が，地元の強い酒“dop”を飲んで興奮剤的に士気を高めるために使用していたことから，この言葉がボーア人（南アフリカのオランダ移住民）を介して，英語の言葉となり，1889年に英語の辞書に初めて現われたとされている（Hanley, 1979）[1]。

当初の意味は，競争馬や競争犬に対して，麻薬等も使用して競技能力を調整することとされていたが，現在では，ヒトも含めて，競技能力を高めるために，不正に薬物等を用いることに変化してきた。

B．ドーピングに伴う事故

競技能力を高めるために薬物を用いたことで死亡した記録に残る最初の例は，1886年にイギリスの自転車選手が，過量のトリメチルを使用した例とされている（Dyment, 1984）[2]。

1960年のローマ・オリンピックにおいて，オランダの自転車選手Kurt Enemar Jensenが，アンフェタミンとロニコールの使用により死亡した（Puffer & Green, 1990）[3]。これが，オリンピックにおける最初のドーピング死亡例である。

1967年7月13日には，ツール・ド・フランス自転車レースの第13ステージで，第13番登録の自転車選手が，アンフェタミンとブランデーの混合物を使用して，死亡した（Cameron, 1994）[4]。

こうした死亡事故がスポーツ界に警告を発し，また，眼を開かせ，ドーピングを抑制しようという具体的動きにつながっていった。

C．ドーピング・コントロール

1964年東京オリンピックにおいて，Dumas医師の援助により，自転車競技の選手を対象に，部分的にドーピング・コントロールが行われた。しかし，これは，ボイコットのため不完全な形のままで終わった。

それらを契機に，国際オリンピック委員会（IOC）のメンバーに選出されたばかりのプリンス・アレキサンドレ・ド・メロードが，アベリー・ブランデージIOC会長との協議を経て，1966年に，薬物使用のコントロールの責任主体となる医事委員会を創設した。その結果，1968年グルノーブル（冬季）とメキシコ（夏季）のオリンピック大会で，最初のドーピング・コントロールが本格的に行われた（Strauss, 1984）[5]（Dirix, 1988）[6]。この時には，表1に示すような5種類の薬物を対象として検査が行われた。1971年に，初めての本格的なドーピングリストを公表した。以後，オリンピックを契機に，また，ドーピング事例の実情に対応して，ドーピング・リストは追加・改訂されており，現在は表2のような内容になっている。

また，1980年，IOC医事委員会は，国際陸連（IAAF）医事委員会の提案に従って，ドーピング・コントロールのための公認検査機関を設置した。この時，18施設が分析機器，分析方法，検査精度等の観点から認定されたが，大半の機関は，ヨーロッパと北アメリカに位置していた（Donike, 1988）[7]。

1995年8月10日現在，公認検査機関は24施設となり，ヨーロッパ15，北アメリカ3，アジア4，アフリカ1，オセアニア1の内訳となり，五大陸に分布している（表3）。

3．ドーピングの実態

A．IOC公認検査機関でのドーピング検査陽性例

1986年から1993年のIOC公認検査機関でのドーピング検査陽性率の推移を図1に示す。この8年間に，検体数は約3倍と大幅に増加している。一方，陽性率は，ソウル・オリンピックの年1988年に2.45%と最高の値を示し，以後急激に低下し，1991年には1%を切るまでになったが，その後再び陽性率が上昇していることがわかる。

1993年度競技種目別陽性率をみると，全競技平均は，0.9%である。もっとも多いのがウェイトリフティング（2.96%），次いでアーチェリー（1.93%），テニス（1.87%），レスリング（1.86%），バスケットボール（1.24%），柔道（1.19%）等の順となっている。（図2）

一方，オリンピック大会におけるドーピング検査陽性

例の実態をみると，夏冬あわせて過去14回の大会で，51例の陽性例（1回平均3.6例）が検出されている（表4）。

1993年度検出薬物の内訳をみると，男性化タンパク同化ステロイドが63.6%と圧倒的多数であり，次いで興奮剤が21.6%で，両者あわせて約85%を占めている。（図3）

最近では，競技会でのドーピング検査の他に，トレーニング中の選手を対象にした競技会外抜き打ち検査（out of competition testing）の数も増し，その分，選手はいつでもどこでもドーピング検査を指示される状況となってきた。

B．水泳におけるドーピング事例

記録に残るヒトのスポーツでの不正な薬物使用の最初の例は，1865年のアムステルダムの運河水泳とされている（Hanley, 1979）[1]。世界で最初のドーピングを行った競技種目となった水泳について，それ以後のドーピング陽性例を，報道資料及び国際水泳連盟資料等から検索し，整理したものが表5である。

1972年のミュンヘンオリンピックでは，男子400m自由形で優勝したアメリカのRick Demontが喘息の治療として用いた興奮剤のエフェドリンが検出されたことで，金メダルを剥奪された。

1988年USオリンピック・トライアルでは，バタフライ女子選手Angel Myersがタンパク同化剤のナンドロロンを使用したことが判明し，ソウル・オリンピックナショナルチームよりはずされた。この際，選手及び父親は，経口避妊薬を用いていることで分析上誤って陽性とされたと抗議したが，認められなかった（Nash, 1988）[8]。

1992年，ドイツ国内検査で陽性例が2例検出された。これ以後，ポーランド国内検査での陽性例を含め，各国内でのドーピング・コントロールが強化されていくことがわかる。

また，1994年広島における国際水連（FINA）の抜き打ち検査で，中国女子選手2名の陽性が判明して以来，FINAの抜き打ち検査により，トレーニング中の薬物使用例が，次々と検出されるようになった。

1994年広島アジア大会では，かねてよりドーピング疑惑の絶えなかった中国選手において，7名（男子4名，女子3名）もの大量のドーピング陽性例が出現するという前代未聞の事態が起こるに至った。

また，1995年にオーストリアの3選手は，抜き打ち検査を拒否し，そのことによりタンパク同化ステロイド使用の場合と同じような厳しい処分を受けた。

つまり，図2に示すように，水泳では，0.7%と決して高いドーピング陽性率ではないが，1865年から1995年の130年間に，様々なエピソードを残している。

4．ベン・ジョンソンのドーピング事件

1988年ソウルオリンピック陸上男子100m走において，ベン・ジョンソン（カナダ）は，9秒79の世界新記録を樹立し，宿敵カール・ルイス（アメリカ）を制し，優勝した。しかし，その後，ドーピング検査の結果，禁止薬物であるタンパク同化剤のスタノゾロールが検出されたため，金メダルを剥奪され，国際陸連より2年間の資格停止，世界記録の取消の処分を受けた。この事件は，世界中に最大級の反響を呼び，ドーピングと言えば，ベン・ジョンソンが代名詞のように取り扱われるまでになった。そして，処分解除後，陸上界に復帰したが，直後に，テストステロンの使用が発覚し，ついに永久追放の処分と相なった。

写真1　ベン・ジョンソン（右1人目）

「世界一速い男」のドーピング，それも2度にわたるドーピングという特異な事例となったが，2回にわたる処分が確定されるまでの経緯もまた，特異であった。表6は，各種報道資料よりその経緯をたどったものである。この中で，特徴的なことは，以下の通りである。

(1) ベン・ジョンソン側が，1回目，2回目の薬物使用時共に，当初は，「使っていない」とはっきり否定し，「第3者による混入」などの陰謀説まで

持ち出していること。

(2) ソウル・オリンピック後早い時期より，国・政府機関・政府要人が，この問題に関わり，積極的に発言し，真相究明のための調査委員会を設置していること。

(3) 調査委員会は，多数の関係者に対して，公聴会を開き，ついに医師，コーチらが禁止薬物を入手し，選手に使用させた事実を明らかにしていること。

(4) 1回目は，最終的には，本人も禁止薬物の使用を認めていること。

(5) 全体として，調査委員会が真相の究明に重要な役割を果たし，世界に対して，公正で明解な姿勢を印象づけたこと。

(6) 一方，1回目の処分内容について，カナダ政府，カナダ陸連，国際陸連，IOC関係者等が，様々な時期にそれぞれ思い思いの発言をし，処分が二転，三転している感を免れないこと。

5．カトリン・クラッベのドーピング事件

バルセロナ・オリンピックの年，1992年の1月に，南アフリカ共和国でトレーニングしていたドイツのカトリン・クラッベら3選手にドイツ陸連が競技会外抜き打ち検査をしたところ，3人の尿サンプルが完全に一致するという奇妙な状況が生じた。これに対して，ドイツ陸連側は，「検査をごまかすための不正行為」と主張し，選手側は，「悪意の工作，検査ミス」と反論するという状況が生まれた。その後の検査で，カトリン・クラッベら2人の選手からβ_2刺激剤（タンパク同化薬の作用をもつ）クレンブテロールが検出され，ドイツ陸連・国際陸連が，資格停止処分を下したが，これを不服として，クラッベ側が訴訟を起こすまで至った。

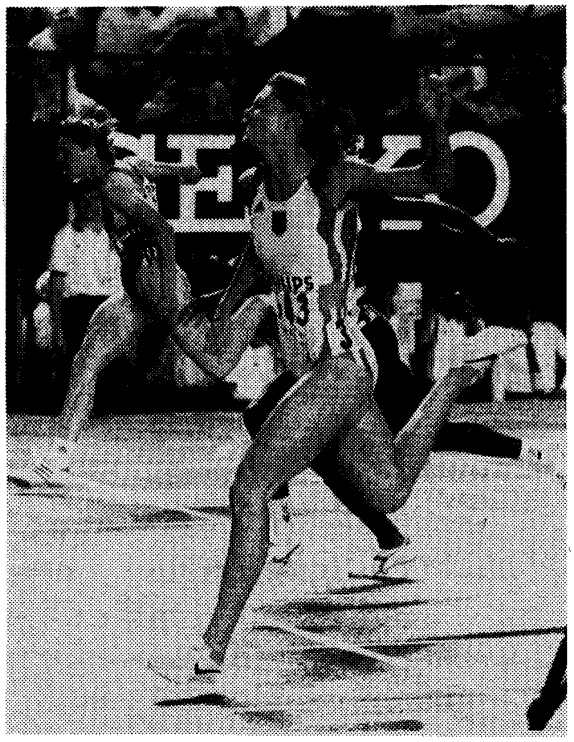

写真2　カトリン・クラッベ（手前）

旧東ドイツ出身の陸上の女王カトリン・クラッベの薬物疑惑ということで，世界の注目を集め続けたが，この経緯もまた，特異な様相を示す。表7は，各種報道資料より，その間の経緯をたどったものである。

この中で特徴的なのは，以下の通りである。

(1) 南アフリカ共和国で行われたドーピング検査の手続きに，厳格さを欠く点があったと考えられること。そのために，不正，検査ミスという形で，後に議論を生む結果を招いていること。

(2) ドイツ連盟内での意見の食い違いや取り扱いに対する見解の違いが多々あり，そのことが連盟側の対応を弱いものとし，あいまいさが表面化し，科学的根拠を重視できなくなり，最終的に処分撤回となっていること。

(3) 2回目の陽性の時には，選手，コーチが薬物使用を認めたにもかかわらず，新しい物質であり，その時点では禁止薬物として判定しにくいということで，最終的には選手らに有利なように，一度出した処分の軽減が行われていること。

(4) 選手側の訴訟により，スポーツのルールに国の法律が介入する結果を生み，ルール違反としてだけの処分が，困難になっていること。

(5) ミュンヘン地裁での選手側の勝訴により，スポーツの現場にどこまで法律が介入するのかという，新たな問題を提起していること。

(6) マスコミも，ドイツ統一前の事情を反映して，「沈黙」の東と「追求」の西という分裂の像を呈していること。

6．中国選手の大量ドーピング事件

1994年の広島アジア大会において，直前の国際水連（FINA）抜き打ち検査及び大会中のドーピング検査において，合計11名の中国選手（競泳7名，陸上1名，カヌー2名，自転車1名）がドーピング検査陽性となり，処分された（この内2名が，抜き打ち検査でも陽性）。

数年前より，特に水泳，陸上競技において「あまりに強い中国選手！」に対して，薬物疑惑の噂が絶えなかった状況の中で発覚した大量のドーピング事件であり，同一国からの選手数の多さと使用薬物の特異さが目立った。その一連の経緯を示したものが，表8である。

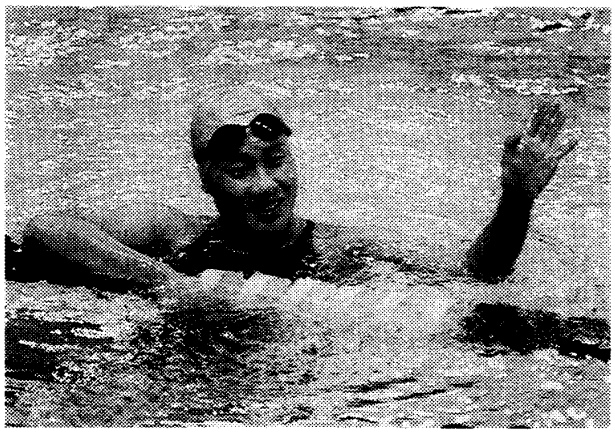

写真3　呂淋

この経緯の中で，特徴的なことは，下記のようなものである。

(1) 当該選手たちは，一貫して「使っていない」と主張し続けたこと。
(2) 中国の関係スポーツ団体役員よりも先に，政府関係者が公式にコメントをしていること。
(3) 11名の大量発覚にもかかわらず，「少数の個人的行為」と中国側，FINA，IOC側も組織的関与をはっきり否定していること。
(4) 大会前の抜き打ち検査と大会中の検査とで，実施主体が異なり，結果の判定と処分に至る決定の手つづきと方法の調整が必要であったこと。
(5) 結果の確定と公表までに，約1カ月半と非常に長い日数を要していること。
(6) FINA及びアジア・オリンピック評議会（OCA）の担当役員が，それぞれの団体としての公式発表前に，陽性結果について報道機関に公表していること。
(7) ジヒドロテストステロン（DHT）という内因性の男性ホルモンの一種で，従来，検出の判定基準が確立していない物質が使用されていたこと。
(8) テストステロン，次いでジヒドロテストステロンへと競技会直前に使用薬物の切り替えが行われるという，複雑かつ巧妙なドーピング方法が用いられていたこと（図4）。
(9) 旧東ドイツのドーピング方法と中国独自の漢方との併用という方法が疑われたこと。
(10) 17才前後の若い女子選手らが含まれており，本人たちの自主的判断による使用というよりも，ドーピングに関する知識・技術・経験の豊富な大人たちの積極的関与が考えられること。
(11) 中国国内に特別調査委員会が設置され，また，FINA特別調査団が中国に派遣されたが，薬物の入手・使用に至る真相の究明と公表がほとんどなされないまま，選手と一部の現場の役員処分でこの事件が終了し，むしろ不透明さを増すことにつながっていると考えられること。
(12) 欧米の水泳連盟，コーチたちが，中国に対してドーピングの疑いを持ち続けていたところへの発覚であり，以後の一部競技会のボイコット等の薬物使用に関わる現場での反発が，非常に強い事態にまで至ったこと。

こうした事実経過の後，冒頭に述べた，翌1995年の福岡ユニバーシアード大会での陸上女子選手のドーピングが判明した。大量ドーピング事件に対しての真相の究明と公表がなされていない状況に連なった，新たなドーピング違反であり，再び同様の対応が取られれば，結局，現場での中国選手，コーチたちへの心理的反撥は，ほとんど消えない状態が持続すると考えられる。

表9は，以上3つのドーピング事件を比較し，それぞれの特性を明示したものである。これらの問題点を総じて述べれば，次の通りである。

(1) ベン・ジョンソンの場合，中立的な機関がしっかりと公開を原則に追求している。選手側の主張も聞き，事実関係を押さえて判断している。
(2) カトリン・クラッベの場合，中立的な機関であるべきドイツ陸連の法務委員会が，内部事情により分裂していた。東西ドイツの政治的立場が絡むため，公正であるべき判断が鈍っている。
(3) 中国においては，中国国内における調査委員会が，どの程度の調査を行っているのかはっきりしていない。選手側の主張・事実関係も不明瞭な点が多く，事件がうやむやのままになっている。処分がなされていても，何のために，誰に行うべきかの判断がなされていない。
(4) カトリン・クラッベ，中国ともに，明解さに欠けるのは，クラッベは旧東ドイツとの，中国は国家体制との関係が，否定できないことに起因している。

7．ドーピング問題の課題

1960年頃，薬物が多くの疾病・障害を取り扱うのに有用だということが社会全体に信じられるようになってきた中で，社会の一部分を成すスポーツの世界でも，選手，コーチ，医師の中に，薬物が成功への近道を成す手だてとなり得るとみなす者が現われてきた（Beckett, 1988）[9]。

ドーピングの効果については，たとえ生理学的に不活性の物質を投与しても，もし選手が「（薬物が）効く」と信じている場合には，そのプラシーボ（偽薬）効果により，競技能力を高めることがあるとされている（Strauss, 1984）[5]。

選手やコーチらは，勝利と成功への強い願望を持ち続け，その一方，敗北と失敗に対する強い不安を抱き続けて競技に臨む。人間の意志と努力によるトレーニング方法もやがて限界が見え始めると，それを越えたところの「禁断の木の実」としてのドーピングに手を出し，それに頼り始めることになる（寒川，1991）[10]。一方，薬物使用は，多くの選手にとって，内的，外的圧力により生じるストレスを軽減させる方法のひとつであろう（Cameron, 1994）[4]。

スポーツの現場での選手，コーチらの置かれている，このような身体的・精神的状況を理解しないまま，ドーピング禁止を訴え，それを押し進めようとしても，容易に効果は得られない。

また，社会の中でスポーツが，そしてスポーツに関わる人々が尊重され，時に畏敬の念を持って迎えられるのは，「スポーツは，よろこび，悲しみ，嘆き，感動，感激，満足，期待，不安，怒り，反省，後悔，なぐさめ，連帯感，孤独感など人生で経験するすべての感情を経験できるという意味で，一種の人生の縮図」（朝比奈，1978）[11]であり，辛く単調な練習・トレーニングを積み重ねてきていることを踏まえ，健康な生活感覚と社会性を備えていると判断されるからであろう。

さらに，スポーツは，それぞれの特有なルールにより，倫理的基盤と枠組を持ち，その中で競い，戦うことが求められている。フェアなプレイがあってこそ，スポーツは尊敬され，社会にも共感と感動を呼ぶものと考えられる。

ドーピングは，科学的手法によりそれらを阻害する因子とみなすことができる。

たとえば，水泳競技において，スタートの不正（フライング），泳法違反，ターンの不正，リレーの引き継ぎの違反等があれば，フェアな競技が保てないわけで，同じ条件で選手同士が戦えないという観点から，直ちに違反を認定し，失格の処分となす。これを担当するのは，審判や泳法監察官であり，競技中の全選手を対象に不正がないかを監察する。それにより，競技が公正に行われ記録も正当なものとして認定されるのである。

一方，ドーピングについては，不正の証明と判定が容易でない。尿もしくは血液を採取し，科学的分析により，薬物の特定をする手続きが必要である。時間，経費，検査場所，専門的技術と経験等を要するため，全選手を対象にできない。そこで，通常は，競技に参加した選手について，無作為抽出という方法をも含めて，集団の代表としての選手について検査を行い，そのことにより競技が公正に行われたとみなし，記録を正式に認定する。実際，陸上競技や水泳競技の世界記録の認定に対して，その選手自身のドーピング検査陰性の証明が必要条件となる動向となっている。

このような位置づけと手順であるがために，どの選手が検査に選ばれたかは，競技が終了するまで秘密とされ，公平さを保つのである。また，分析検査の結果についても，二次検査により一次検査の分析で得られた薬物が，再び同定されるまで，“陽性”とはみなされないことは，選手の人権と立場を守るために，非常に重要である。

その意味で，広島アジア大会時の手続きの中間段階で，担当役員が結果の一部を公表したことは，問題が残るであろう。また，処分が確定するまでに，カトリン・クラッベ事件のように，関係者が不容易で無責任な発言を繰り返し，選手への対応が二転・三転する結果を生むことは望ましくない。

一方，薬物使用の事実が判明した場合には，選手，コーチ，当該団体等は，率直にそのことを認め，処分を受け入れる反省の態度を鮮明にすべきである。ベン・ジョンソン事件や中国大量ドーピング事件のように，抗弁したり，嘘の証言を繰り返せば，スポーツそのものの信頼が揺らぎかねない。

さらに，真相を究明し，薬物入手と使用の事実を明らかにすることは，当該選手を抱える団体・国の社会的責務であろう。不正の原因と実態が探究され明示されてこそ，より具体的でより有効なドーピング防止・抑制対策が生まれるのである。

ドーピングは，公正な競技を損ない，選手の健康を損ない，社会でのスポーツの価値と信頼を損なうものである。そして，ドーピング・コントロールは，薬物等を不正に使用した選手を摘発するために行われるのではなく，懸命に練習・トレーニングを続けている真面目な選手たちの権利を守り，その努力と苦労に報いるために行われ

るのである。

そのことを選手，コーチ，スポーツ関係者そして社会全体に教育することが，もっとも重要な課題である。

引用文献

1) Hanley,D.F. 1979, Drug use and abuse, in Sports Medicine and Physilogy (Strauss,R.H.Ed.), W.B.Saunders, pp396-404.
2) Dyment,P.G., 1984, Drugs and the adolescent athlete, Pediatr Ann, 602-604.
3) Puffer,J.C. and Green,G.A., 1990, Drugs and Doping in Athletes, in The Team Physicians Handbook, Hanley & Belfus, pp111-127.
4) Cameron,J.M. 1994, Pharmacological Physiology of Swimming, in Medicine and Science in Aquatic Sports (Miyashita, Mutoh, Richardson Eds.), Karger, pp1-7.
5) Strauss,R.H. 1984, in Sports Medicine, W.B.Saunders (Strauss. R.H.Ed), pp481-491.
6) Dirix,A. 1988. Classes and Methods, in the Olympic Book of Sports Medicine, Blackwell Scientiic Publications (Dirix.A.et al Eds.), pp669-675.
7) Donike,M. 1988. Dope analysis, ibid pp676-680.
8) Heyward L.Nash 1988. Reflections on the Medical Aspects of the 1988 Olmpic Summer Games, The Physician and Sportsmedicine, pp118-123.
9) Beckett,A.H. 1988. The doping problem, 前掲書[6], pp655-658.
10) 寒川恒夫編著，1991，図説スポーツ史，朝倉書店，pp170-171.
11) 朝比奈一男，1978，スポーツとドーピング，スポーツ医学（石河利寛，松井秀治編）pp339-355.

〔写真提供：共同通信〕

表1　オリンピックと禁止薬物の変遷

年	大会名	禁止薬物内容	備　考
1968	グルノーブル冬季 メキシコ夏季	1．自律神経アミン（アンフェタミン，エフェドリン，その他の類似薬物） 2．中枢神経刺激剤（ストリキニンと興奮剤等） 3．麻薬性鎮痛剤（モルフィンと類似薬物） 4．抗うつ剤（M.A.O阻害剤とイミプラミン類似薬物） 5．精神安定剤（フェノチアジン等）	
1971		IOC医事委員会は，ドーピングリストを発表。 1971年5月19日ミュンヘンでの会議において，詳細なドーピングリストを提唱した。	
1976	インスブルック冬季 モントリオール夏季	タンパク同化ステロイドがリストに加わった。	
1980	レイクプラシッド冬季 モスクワ夏季		競技会の2，3週間前よりアナボリックステロイドからテストステロンに切り替えて使用している者が出ていたが，検出が困難であった。
1984	サラエボ冬季 ロサンゼルス夏季	その他の中枢神経興奮剤の中にカフェインが追加された。（15μg／ml以上） タンパク同化ステロイドに，テストステロン（男性ホルモン）が，追加された。	
1986		IOC医事委員会は，血液ドーピングを禁止すると共に，βブロッカー（9種及び関連化合物），利尿剤（15種及び関連化合物）を新たに加え，1988年より適用決定。	IOCやいくつかの国際競技連盟は，トレーニング期の抜き打ち検査（Out of Competition Testing）を開始した。
1988	カルガリー冬季 ソウル夏季	精神運動興奮剤，自律神経刺激剤，その他の中枢神経刺激剤を刺激興奮剤として一括。βブロッカー，利尿剤を新たに加え，薬物以外に血液ドーピングと薬理学的（プロベネシド），化学的，物理的操作をドーピング操作として加えた。制限物質として，アルコール，局所麻酔剤，副腎皮質ステロイドを加えた。カフェインの濃度については，12μg／ml以上と変更された。	
1992	アルベールビル冬季 バルセロナ夏季	ペプチドホルモン（ヒト成長ホルモン，ヒト絨毛性性腺刺激ホルモン，ACTH，エリスロポイエチン）が加わった。	
1993		バルセロナオリンピックで，タンパク同化作用を持つβ2刺激剤であるクレンブテロールが用いられたので，タンパク同化ステロイドの分類を“タンパク同化薬”とし1．男性化タンパク同化ステロイド　2．β2刺激剤と改訂した。βブロッカーを禁止薬物から制限物質として，競技種目によって検査されるべき薬物とした。	
1994		IOCは，国際競技連盟（IF），国内政府機関（NGB），国内オリンピック委員会（NOC）と協力しあうため，オリンピック大会だけでなく，すべての競技に通じるように改正され，合意の下，ドーピングの定義を示した。IOC／IFのドーピング・コントロールの新しい委員会が結成された。ペプチドホルモンの項に，糖タンパクホルモンが含まれた。テストステロン／エピテストステロンの比が6以上のものを陽性とすることにした。	

（福島（太田），武藤，青木）

表2

ドーピングの定義,
ドーピング指定薬物リストと方法
IOC (International Olympic Committee)
医事委員会
1994年9月5日発表

定義

ドーピングは，スポーツおよび医・科学の倫理に反するものである。

IOC医事委員会は，次の事項を禁止する。

1．指定された薬物分類に属する物質の投与
2．種々のドーピング行為

指定薬物分類・方法

Ⅰ．DOPING CLASSES
- A．Stimulants（興奮剤）
- B．Narcotics（麻薬性鎮痛剤）
- C．Anabolic Agents（タンパク同化薬）
- D．Diuretics（利尿剤）
- E．Peptide and glycoprotein hormones and analogues（ペプチドホルモン，糖タンパクホルモンと類似化合物）

Ⅱ．DOPING METHODS
- A．Blood doping（血液ドーピング）
- B．Pharmacological, chemical and physical manipulation（薬理学的，化学的，物理的操作）

Ⅲ．CLASSES OF DRUGS SUBJECT TO CERTAIN RESTRICTIONS（制限薬物）
- A．Alcohol（アルコール）
- B．Marijuana（大麻）
- C．Local anaesthetics（局所麻酔剤）
- D．Corticosteroids（副腎皮質ステロイド）
- E．Beta-blockers（ベータ遮断剤）

Ⅰ．ドーピング薬物

A．興奮剤

アミフェナゾール
アンフェタミン
アミネプチン
カフェイン（尿中>12μg／ml）
コカイン（塩酸コカイン末）
エフェドリン（麻黄：葛根湯など）
フェンカムファミン
メソカーベ
ペンチルエンテトラゾール
ピプラドール＝ピピラドロール（カロパン）
その他関連物質
＊以下のβ2刺激剤は，吸入での使用のみ許可されるが，届け出が必要
サルブタモール（ベネトリン，サルタノール等）
テルブタリン（ブリカニール等）
注：イミダゾール製剤（オキシメタゾリン）は局所使用は許可
血管収縮剤（アドレナリン）は局所麻酔剤と共に使用されることは許可
フェニレフリンの局所使用許可（点鼻，点眼）

B．麻薬性鎮痛剤

デキストロモラミド
デキストロプロポキシフェン＝プロポキシフェン
ディアモルヒネ＝ヘロイン
メサドン
モルヒネ（阿片，塩酸モルヒネ，オピアト，オピスコ，MSコンチン）
ペンタゾシン（ソセゴン，ペンタジン等）
ペチジン＝メペリジン（オピスタン等）
その他関連物質
注：コデイン，デキストロメトルファン（メジコン），ジヒドロコデイン，ジフェノキシレート，フォルコジンは使用許可

C．タンパク同化薬

1．男性化タンパク同化ステロイド（AAS）

クロステボール
フルオキシメステロン（ハロテスチン）
メタンジエノン＝メタンドロステノロン（エンセファン）
メテノロン（プリモボラン，プリモボランデポー）
ナンドロロン（デュラボリン，デカデュラボリン等）
オキサンドロロン（ロナパール）
スタノゾロール（ウインストロール）
テストステロン＊
その他関連物質

＊テストステロンの投与を禁止する。尿中のテストステロン（T）／エピテストステロン（E）が，6以上の場合，生理学的・病理学的に異常を認めない限り，違反とする。T／Eが，6を越えた場合，当該医事責任者は，陽性と判定する前に，調査を行わなければならない。調査結果が，充分でない場合，選手は，3カ月間，少なくとも1カ月に1度は，抜き打ち検査を受けなければならない。この調査への協力を拒んだときには，検査陽性と見なされる結果となる。

2．β2刺激剤
クレンブテロール
サルブタモール
テルブタリン
サルメテロール
フェノテロール
その他関連物質

D．利尿剤
アセタゾラミド（ダイアモックス等）
ブメタニド（ルネトロン等）
クロルタリドン（ハイグロトン）
エタクリン酸（エデクリル）
ヒドロクロロチアジド（エシドレックス，ダイクロトライド，エシドライ，ダイクロトライドS等）
マニトール
マーサリル
スピロノラクトン＝スピロラクトン（アルダクトンA，アルマトール等）
トリアムテレン（ヂウセルピン，トリテレン，コンサート，ハイヂウレーゼS）
その他関連物質

E．ペプチド及び糖蛋白ホルモンとその類似物
1．胎盤性性腺刺激ホルモン
〔HCG：ヒト絨毛性性腺刺激ホルモン〕
（GCGモチダ，HCGフジ，プベローゲン，ゴナトロピン，プレグニール）
2．副腎皮質刺激ホルモン〔ACTH〕
（コートロシン，コートロシンZ）
3．成長ホルモン〔HGH：ソマトトロピン〕
（注射用ヒト成長ホルモン，グロウルム，コルポルモン，ソマトノルム，ジェノトロピン，ノルディトルピン，ヒューマトロープ）
4．エリスロポイエチン〔EPO〕

Ⅱ．ドーピング方法

A．血液ドーピング

血液ドーピングは，競技者に対して，血液や赤血球または関連製剤を投与することである。前もって競技者から血液を採取しておき，血液が不足した状態でトレーニングを継続し，競技直前に再注入を行うことは，医学さらにはスポーツの倫理に背くこととみなされる。危険性を伴うことから，こうした行為は禁止される。

B．薬理学的，化学的，物理的不正操作

尿サンプルの状態や正当性を変化させる物質の使用や，方法を禁止する。

・カテーテルによる尿の交換や操作
・プロベネシッドや関連化合物による腎臓排泄の抑制
・エピテストステロンの使用（尿中エピテストステロン濃度が，200ng／ml以上の時は，分析機関は，当該医事責任者に届けなければならない）

Ⅲ．一定の規制の対象となる薬物

A．アルコール

B．マリファナ

国際スポーツ団体と責任を有する専門家の意見に基づき検査を施行することが出来る。その結果，制裁を伴うことがある。

C．局所麻酔剤
a．プピバカイン，リドカイン，メピバカイン，プロカインは使用可能。コカインは禁止。これらの局所麻酔剤と共に，血管収縮剤（アドレナリン等）が，用いられることもありうる。
b．局所，関節内注射のみ許可
c．医学的に正当と認められた場合に限って診断内容の詳細，投与量，方法を申告書に記入し提出する義務がある。

D．コルチコステロイド
以下の使用以外は，禁止とする。
a．局所使用（経耳，経皮，点眼），但し経腸的使用は禁止。
b．吸入（喘息，アレルギー性鼻炎）
c．局所，関節内注射
チームドクターは，これらの投与を行う場合には，当該医事責任者に申告書を提出する義務がある。

E．β遮断剤
アセブトロール（アセタノール，セクトラール）
アルプレノール（アプロパール）
アテノロール（テノーミン）
メトプロロール（セロケン，ロプレソール）
ラベタロール（トランデート）
オクスプレノール（トラサコール等）
ナドロール（ナディック）
ソタロール
プロプラノロール（インデラル等）
その他関連物質

国際競技連盟の要望に応じて，検査されることがある。

アーチェリー，ボブスレー，飛込，シンクロナイズド・スイミング，リュージュ，近代五種，射撃，スキー・ジャンプ，フリースタイル・スキー等。

表3　IOC公認検査機関

	大　　陸	国　　名	都 市 名	grade
1	EUROPE	Germany	COLOGNE	
2		Denmark	COPENHAGEN	
3		Finland	HELSINKI	
4		Sweden	HUDDINGE	
5		Germany	KREISCHA	
6		Switzerland	LAUSANNE	
7		Spain	BARCELONA	
8		Norway	OSLO	
9		France	PARIS	
10		Czech Republic	PRAGUE	
11		Italy	ROME	
12		Portugal	LISBON	
13		United Kingdom of Great Britain	LONDON	
14		Spain	MADRID	
15		Greece	ATHENS	PHASE Ⅱ＊＊
16	NORTH AMERICA	United States of America	INDIANAPOLIS	
17		United States of America	LOS ANGELES	
18		Canada	MONTREAL	
19	ASIA	People's Republic of China	BEIJING	
20		Korea	SEOUL	
21		Japan	TOKYO	
22		Republic of Russia	MOSCOW	PHASE Ⅰ＊
23	AFRICA	Republic of South Africa	BLOEMFONTEIN	
24	OCEANIA	Australia	SYDNEY	

(1995年8月10日現在：福島（太田），武藤，青木)

＊　PHASE Ⅰ：国際大会での分析は不可。国内大会での分析は，Aサンプルが陽性であった場合，Bサンプルの分析は，他のIOC公認検査機関で行わなければならない。

＊＊PHASE Ⅱ：Aサンプルが陽性であった場合は，Bサンプルの分析は，他のIOC公認検査機関で行わなければならない。

表4　オリンピック大会におけるドーピング検査陽性例

年	大会名	競技種目	例数	検出薬物
1968	グルノーブル	なし	0	
	メキシコ	近代五種	1	アルコール
1972	札幌	アイスホッケー	1	エフェドリン
	ミュンヘン	重量挙げ	2	エフェドリン3 ニケタミド2 アンフェタミン，フェンメサジン1
		自転車	2	
		バスケットボール	1	
		水泳	1	
		柔道	1	
1976	インスブルック	スキー	1	エフェドリン
		アイスホッケー	1	コデイン
	モントリオール	射撃	1	アンフェタミン
		重量挙げ	1	フェンカンファミン
		ヨット	1	フェニールプロパノルアミン
		陸上競技	1	タンパク同化ステロイド
		重量挙げ	7	タンパク同化ステロイド
1980	レイクプラシッド	なし	0	
	モスクワ	なし	0	
1984	サラエボ	スキー	1	タンパク同化ステロイド
	ロサンゼルス	バレーボール	1	エフェドリン
		バレーボール	1	テストステロン
		重量挙げ	5	タンパク同化ステロイド
		レスリング	1	タンパク同化ステロイド
		陸上競技	3	タンパク同化ステロイド
		陸上競技	1	テストステロン
1988	カルガリー	アイスホッケー	1	テストステロン
	ソウル	近代五種	1	カフェイン
		近代五種（射撃）	1	プロプラノロール
		重量挙げ	1	ペモリン
		重量挙げ	2	フロセミド
		重量挙げ	2	タンパク同化ステロイド
		陸上競技	1	タンパク同化ステロイド（スタノゾロール）
		レスリング	1	フロセミド
		柔道	1	フロセミド
1992	リレハンメル	なし	0	
	バルセロナ	陸上競技（走り幅跳び）	1	興奮剤
		陸上競技（ハンマー投げ）	1	クレンブテロール
		陸上競技（砲丸投げ）	1	クレンブテロール
		マラソン	1	ノルエフェドリン
		バレーボール	1	ストリキニーネ

（IOC資料，各種報道資料より作成：福島（太田），武藤，青木）

表5　水泳におけるドーピング事例

年	競技会名 競技会外	選手名	性別	国名	使用薬物分類 (使用薬剤名)	処分	備考
1865	アムステルダム運河水泳競技				興奮剤 (アンフェタミン)		
1972	ミュンヘン五輪	Rick Demont	男	アメリカ	興奮剤 (エフェドリン)	金メダル剥奪	喘息の治療として使用した
1976	モントリオール五輪	Korneria Ender	女	旧東ドイツ			出典　サンケイ　91/12/8 本人の告白による
1978	ベルリン世界選手権	Victor Kuzunetsov	女	ソ連			
1980	モスクワ五輪	Yolk Voite	男	旧東ドイツ			出典　90/12/6AP 本人の告白による
1980	モスクワ五輪	Christine Knakke	女		タンパク同化剤		出典　東京　89/7/10 本人の告白による
1983	カナダ選手権	Levent Mady		カナダ		2年間資格停止	
1988	USオリンピックトライアル	Angel Myers	女	アメリカ	タンパク同化剤 (ナンドロロン)	ソウルオリンピック・ナショナルチームからはずされる，2年間資格停止	
1988		Reike Hanneman	男	旧東ドイツ	タンパク同化剤		出典　90/12/6 AP 本人の告白による
1991	全アフリカ競技会	Senda Gharbi		タンザニア		18ケ月資格停止	
1991	全アフリカ競技会	Emad El-Shafei		エジプト		18ケ月資格停止	
1992	ドイツ国内検査	Astrid Strauss		ドイツ	タンパク同化剤 (テストステロン)	6ケ月資格停止	ドイツ水連発表
1992	ドイツ国内検査	Suben Hakkman	男	ドイツ	タンパク同化剤	6ケ月資格停止	ドイツ水連が発表
1993	欧州スプリント選手権	Sylvia Gerasch	女	ドイツ	興奮剤 (カフェイン)	2年間資格停止	
1993	FINAワールドカップ（北京）	Xin Zhou	女	中国	タンパク同化剤 (メサンジエノン)	2年間資格停止	
1993	Canadian Summer Nationals	Miguel Munoz		カナダ/スペイン		2年間資格停止	
1993		Fernando Fleitas		アルゼンチン	興奮剤 (カフェイン)	2年間資格停止	
1993	ポーランド国内検査	Alicja Peczak		ポーランド	タンパク同化剤 (テストステロン)	2ケ月資格停止	ポーランド水連が発表
1993	Indonesian National Sports Week	Catherine Surya	女	インドネシア	タンパク同化剤 (ナンドロロン)	2年間資格停止	
1994	FINAワールドカップ（北京）	Weiyue Zhong	女	中国	タンパク同化剤 (メサンジエノン， メチルテストステロン)	2年間の出場停止，50m，100mバタフライで出した短水路世界記録抹消	
1994	FINAワールドカップ（SWE）	Xiuyu Bai	女	中国	興奮剤 (エフェドリン)	1ケ月資格停止	
1994	グッドウィルゲーム	Ren Xin	女	中国	タンパク同化剤 (テストステロン)	2年間資格停止，2個の金メダル剥奪	

年	競技会名 競技会外	選手名	性別	国名	使用薬物分類 (使用薬剤名)	処分	備考
1994	FINA抜き打ち検査 アジア大会(広島)	Aihua Yang	女	中国	タンパク同化剤 (テストステロン, ジヒドロテストステロン)	2年間資格停止	
1994	FINA抜き打ち検査 アジア大会(広島)	Bin Lu	女	中国	タンパク同化剤 (ジヒドロテストステロン)	2年間資格停止,金メダル剥奪	
1994	アジア大会(広島)	Guanbin Zhou	女	中国	タンパク同化剤 (ジヒドロテストステロン)	2年間資格停止,金メダル剥奪	
1994	アジア大会(広島)	Guoming Xiong	男	中国	タンパク同化剤 (ジヒドロテストステロン)	2年間資格停止,金メダル剥奪	
1994	アジア大会(広島)	Bin Hu	男	中国	タンパク同化剤 (ジヒドロテストステロン)	2年間資格停止,金メダル剥奪	
1994	アジア大会(広島)	Bin Zhang	男	中国	タンパク同化剤 (ジヒドロテストステロン)	2年間資格停止,銀メダル剥奪	
1994	アジア大会(広島)	Yong Fu	男	中国	タンパク同化剤 (ジヒドロテストステロン)	2年間資格停止,銅メダル剥奪	
1995	FINA抜き打ち検査	Petteri Lehtinen	男	フィンランド	タンパク同化剤 (サルブタモール)	2年間資格停止	喘息の治療のための事前申告を怠った
1995	オーストリア抜き打ち検査	Brothers Michael		オーストリア		2年間資格停止	抜き打ち検査拒否のためとオーストリア水連発表
1995	オーストリア抜き打ち検査	Bernhard Rausch		オーストリア		2年間資格停止	抜き打ち検査拒否のためとオーストリア水連発表
1995	オーストリア抜き打ち検査	Gertraud Lackner		オーストリア		2年間資格停止	抜き打ち検査拒否のためとオーストリア水連発表

(福島(太田),武藤,青木)

表6　ベン・ジョンソンのドーピング事件の経緯

年　月　日 発　言　者	要　　約	出　典	日　付
88. 9.27 韓国日報	ソウル五輪陸上百m優勝者，ベン・ジョンソンにドーピングの疑い。アナボリックステロイド（筋肉増強剤）が検査の結果，検出された。IOC医事委員会はカナダ選手団長に内々にこの件を伝達。カナダ側はでっち上げとして反論	読売ソウル支局 読売	88. 9.26 88. 9.27
88. 9.27 IOCメロード医事委員長	ベン・ジョンソンのドーピング検査結果を陽性として金メダルの剥奪と，ソウル五輪からの失格を発表。この処分は26日の医事委員会が勧告，27日の理事会にて決定。カナダ代表もこの処分を受諾。	読売特派員団 読売夕	88. 9.27 88. 9.27
88. 9.27 国際陸連（IAAF）	ジョンソンの2年間の競技者資格の停止と9秒79の世界記録の取消を決定。なお，87年の世界選手権の9秒83は抹消しないとした。	同上 同上	
88. 9.27 カナダ政府	ジョンソンを終身，代表から外すとの厳しい態度を表明。	トロント 同上	88. 9.27
88. 9.27	ジョンソン，トロント郊外の自宅へ帰着。空港では報道陣に対して無言。しかし，同選手のスポークスマンは2，3日中の記者会見の見通しを発表。	トロント 読売夕	88. 9.27 88. 9.28
88. 9.27 マルルーニ首相（加）	ジョンソンの金メダル剥奪について，「ジョンソンとその家族のみならず，多くのカナダ国民にとって悲しむべきこと」と遺憾の意を発表。	ニューヨーク 同上	88. 9.27
88. 9.27 米CNN	ジョンソンが今回の五輪失格で失った広告契約料は，2億7千万円と推定されると報道。	時事 同上	88. 9.27
88. 9.27 ジャン・シャレ体育相（加）	ジョンソンが88年8月のチューリッヒでの競技会の際，ドーピング検査をパスしていたと発表。この発言は同選手が88年2月以来検査を受けていなかったのではという疑惑を否定したもの。また，87年8月に世界記録をマークするまでの過去2年間で少なくとも8回の検査を受けたとも発表。	時事 同上	88. 9.27
88. 9.28 スポーツイラストレイティッド（米誌）	88年5月にジョンソンが筋肉増強剤の注射を受けていたと報道。肉離れの治療としての投与で，本人も禁止薬物であることを承知していたが，ソウル五輪後はやめたいと切望。投与したとされる医師はこの報道を否定。	時事 読売	88. 9.28 88. 9.29
88. 9.28 ジャン・シャレ体育相（加）	ソウル五輪後，ジョンソンのドーピング問題で調査を行うと表明。筋肉増強剤の投与に関する事実関係を探る。	トロント 同上	88. 9.28
88. 9.29 セルゲイ・ブブカら	ジョンソンの薬物使用に関して，「薬物入手経緯の徹底究明を求める」との声明を発表	ソウル 読売	88. 9.29 88. 9.30
88. 9.29 シュテルン（独誌）	ジョンソンが西独の有力週刊誌「シュテルン」と，今回の事件についての手記を掲載する契約を結ぶ。	AP 読売夕	88. 9.29 88. 9.30
88. 9.29 ジャン・シャレ体育相（加）	「ジョンソンがけがの治療としてステロイド注射を受けただけなら，彼は被害者でもある」と表明。	時事AFP 読売	88. 9.29 88.10. 1
88. 9.29 マリオ・アスタファン医師	ジョンソンに対し，5月に太もも，足首の治療の目的で禁止薬物ではない，コルチコステロイドを使用したことを認める。	同上 同上	
88. 9.30 ゲーリー・ルビン（コーチ）	ジョンソンの所属するクラブのコーチ，ゲーリー・ルビン氏はテレビのインタビューに対し，87年のローマの世界選手権で世界新を出した際も，アスタファン医師から薬物を受けていたと発言。同氏はアスタファン医師から直接聞いた話として，同医師が9秒83の世界新を出す4日前と，レース4時間前に「ちょっと特別なもの」を与え，「違法なものなので，これは隠さなければならない」と語ったという。	ロイター共同 読売	88. 9.30 88.10. 1

年 月 日 発 言 者	要 約	出 典	日 付
88.10. 1 ベン・ジョンソン	トロント・サン紙のインタビューに対し，「禁止薬物は絶対に使っていない」と表明。また，アスタファン医師から百m決勝の3，4日前に抗炎症ホルモン剤の投与を受けたと述べた。さらにドーピング検査室に多くの部外者が入っていたとし，「陰謀説」を示唆。カナダ選手団からの無期限資格停止の処分に対しては，「カムバックして次の五輪で無実を証明したい」とした。失格後，自ら心情を明らかにしたのはこれが初めて。	ロイター共同 読売	88.10. 1 88.10. 2
88.10. 4 ベン・ジョンソン	ジョンソンはフターマン弁護士と会見に臨み，故意に筋肉増強剤を使用してきたという疑惑を否定する声明を発表。また声明の中で，次回の五輪での復帰を考えていることを明らかにし，競技生活の続行を示唆。同弁護士は疑惑解明についてはカナダ政府の調査に委ねるとした。	トロント 読売	88.10. 4 88.10. 5
88.10. 5 シャレ体育相（加）	ジョンソンのドーピング疑惑究明のための真相究明委員会の発足を表明。委員長はオンタリオ州裁判所のドゥビン裁判官。	トロント 読売	88.10. 5 88.10. 6
88.10. 6 トロント・スター紙	アスタファン医師が禁止薬物であるステロイド・スタノゾロールを購入していたことが判明したと報道。	トロント 読売	88.10. 6 88.10. 7
88.10. 9 アンジェラ・イサジェンコ選手	カナダの女子短距離界の第一人者アンジェラ・イサジェンコ選手は禁止薬物である筋肉増強剤を，ジョンソンと共にアスタファン医師からもらっていたと発言。84年以降，ジョンソンが同医師から薬物をもらいにいっており，87年のローマでの世界選手権の際も，同医師がジョンソンにステロイド剤を飲ませていたと述べた。	トロント 読売	88.10. 9 88.10.11
88.10.24 カナダ陸連	ジョンソンへの2年間の資格剥奪を決定，同時に同選手のコーチ，チャーリー・フランシス氏の無期限資格停止も決定した。	トロント 読売	88.10.24 88.10.25
88.11.13 カナダオリンピック委員会	今後の五輪，パンアメリカン大会のカナダ代表委員に対して，無作為の薬物テストを行うと発表。	AP 読売	88.11.13 88.11.15
89. 2.16 アスタファン医師	「ジョンソンは88年5月にけがの治療の目的で，トロントで自ら，または誰かに頼んで購入し服用した」と発表。また「服用直後に筋けいれんを起こし，私のところに連れてこられ，治療してトップコンディションに戻した」とも述べた。	トロント 読売夕	89. 2.16 89. 2.17
89. 2.27 ジャック・スコット氏	88年6月からジョンソンのカウンセラーを務めてきた，スコット氏は「ランナーズワールド」誌でアスタファン医師がジョンソンに，それとは知らせず，20から30錠のステロイドを投与していたと発言した。	AP 読売	89. 2.27 89. 3. 1
89. 2.28 チャーリー・フランシス氏	ドーピング問題真相究明の調査委員会の公聴会において，フランシスコーチが証言。薬物使用についての新証言はなし。	AP 読売	89. 2.28 89. 3. 2
89. 3. 1 チャーリー・フランシス氏	カナダ政府の調査委員会の公聴会において，ジョンソンのコーチ，フランシス氏は，彼が禁止薬物と知りながらアナボリックステロイドを81年秋から使用していたと証言した。当初は1日5mg程度のディアナボルを服用し，82年からはスタノゾロールを使用していた。同コーチはソウル五輪女子百m優勝者の，フローレンス・ジョイナーの薬物使用も暗に示唆した。	ニューヨーク 読売夕 読売	89. 3. 1 89. 3. 2 89. 3. 3
89. 3. 2 チャーリー・フランシス氏	調査委員会の公聴会2日目，フランシス氏はジョンソンが9秒83の世界記録をマークした87年ローマ世界選手権直前にも，アスタファン医師の指示でアナボリックステロイドを使用していたと証言した。	ニューヨーク 読売夕	89. 3. 2 89. 3. 3

年　月　日 発　言　者	要　　約	出　典	日　付
89. 3. 2 国際陸連・ジョン・ホルト事務局長	カナダ政府調査委員会の公聴会2日目の元コーチの証言を受け,「ジョンソンが87年世界選手権で出した9秒83は抹消されない」と語った。	UPI共同 読売	89. 3. 2 89. 3. 4
89. 3. 3 国際陸連・ルンドクイスト医事委員長	ジョンソンが9秒83の世界記録をマークした87年世界選手権でのドーピング検査には不備があった可能性があると語った。当時の検査技術ではスタノゾロールを検出するのは非常に困難と語る。	AP 読売	89. 3. 3 89. 3. 5
89. 3. 3	カナダ政府調査委員会の公聴会は3日から休会，フランシス元コーチは6日から再開される。また，公聴会ではジョンソン自身や主治医のアスタファン医師の喚問も行われる見通し。	AP 同上	89. 3. 3
89. 3. 6 チャーリー・フランシス氏	再開された公聴会において，フランシス元コーチは，「ソウル五輪前の9月2日までアナボリックステロイドを使用していたが，これは検出されたスタノゾロールではなく，フラザボルなどである」と証言し，同氏は検出されたスタノゾロールはジョンソンが尿検査を待つ間に，第三者によって飲物に混入された疑いがあると示唆した。	AP 読売	89. 3. 6 89. 3. 8
89. 3. 8 エドワード・フターマン弁護士	カナダ政府調査委員会で，ジョンソンの弁護士，フターマン氏は「ジョンソンがステロイドを使用しはじめた当時，19歳でまだ意味が分からなかった」「コーチの指示に対する本人の理解力に疑念を抱く人もあった」とし，フランシス元コーチ側から一方的に薬物使用に導いたと疑問を提起した。これに対しフランシス氏は「ジョンソンは薬物使用の意味を十分理解していた」と反論。	時事 読売	89. 3. 8 89. 3.10
89. 3.10	カナダ政府調査委員会の公聴会は，フランシス元コーチへの尋問を終了。同氏は薬物使用無しに大国に勝つのは不可能とし，薬物汚染の拡大を指摘，他のコーチ・選手も実態を明らかにすべきと訴えていた。また，同氏の証言で薬物使用を指摘された，女子短距離のアンジェラ・イサジェンコ選手（加）の喚問を13日から行う。	時事AFP 読売	89. 3.10 89. 3.12
89. 3.13 アンジェラ・イサジェンコ選手	カナダ政府調査委で，カナダ女子短距離界のイサジェンコ選手は，自らの「薬づけ」の日々を克明に証言した。	トロント 読売夕	89. 3.13 89. 3.14
89. 3.13 アンジェラ・イサジェンコ選手	調査委公聴会で，イサジェンコ選手は84年にカリブ海の島でトレーニングしたときジョンソンから成長ホルモンをもらったと証言。この薬はジョンソンがアスタファン医師からもらい，トロントから持ってきたものと語った。	AP 読売	89. 3.13 89. 3.15
89. 3.14 アンジェラ・イサジェンコ選手	調査委公聴会でイサジェンコ選手は，84年の3月か4月にジョンソンにアナボリックステロイドを注射したと証言。また，彼自身が何を注射されているのか知っていたとし，「知っていながら薬物を使用したことはない」というジョンソンの発言を否定。	トロント 読売夕	89. 3.14 89. 3.15
89. 3.15 アンジェラ・イサジェンコ選手	調査委公聴会でジョンソンの薬物使用を示唆したイサジェンコ選手に脅迫電話が殺到していると語った。	共同 読売夕	89. 3.15 89. 3.16
89. 3.16 アンジェラ・イサジェンコ選手	調査委公聴会でイサジェンコ選手は，同選手やジョンソンがソウル五輪前まで使用していた薬物は，ジョンソンから検出されたスタノゾロールであったと思うと証言し，フランシス元コーチの「第三者による混入」疑惑を否定。	トロント 読売	89. 3.16 89. 3.18

年　月　日 発　言　者	要　　約	出　典	日　付
89. 3.23 カール・ルイス選手	米国下院司法委員会の犯罪小委員会の公聴会で，カール・ルイス選手はソウル五輪の陸上のメダリストのうち，少なくとも5～10人はアナボリックステロイドを使用していると証言。また，多くの薬物使用者はカナダやメキシコから通信販売で薬物を購入していると語った。ジョンソン選手については「薬物がなければ，カナダの代表にすらなれなかっただろう」と述べた。	共同 読売夕	89. 3.23 89. 3.24
89. 4. 3 ティム・ベチューン氏	カナダ政府ドーピング調査委員会で，短距離選手ベチューン氏はジョンソンの薬物使用を明らかにした。	トロント 読売	89. 4. 3 89. 4. 5
89. 4. 3 米国陸連	米国陸連はジョンソンの主治医アスタファン氏に同医師が薬物を渡した選手の名簿を提出するよう要求した。	AP 同上	89. 4. 3
89. 4. 5 アンドリュー・モワット選手	調査委員会公聴会で短距離のモワット選手はジョンソンから，86年ころにステロイドの皮下注射を頼まれ，それを注射したと証言した。	AP 読売夕	89. 4. 5 89. 4. 6
89. 4.11 デサイ・ウイリアムズ選手	カナダの短距離選手ウイリアムズ氏は，調査委公聴会で筋肉増強剤を使用したくなかったため，フランシスコーチとの関係を絶ったことがあると証言。81年から同コーチに筋肉増強剤のダイアナボルを勧められたが，自ら内緒で廃棄，83年秋頻繁に同コーチが勧めるので関係を絶った。しかし，87年の世界選手権に敗れてから，週2回の筋肉増強剤の注射を受けた。	UPI共同 読売	89. 4.11 89. 4.13
89. 4.15 カナダオリンピック委員会 ロジャー・ジャクソン会長	調査委員会の実態解明のさなかにある，ジョンソンについて，バルセロナ五輪への出場がありうることを示唆した。	時事 読売	89. 4.15 89. 4.17
89. 4 IOCサマランチ会長	IOCサマランチ会長は，ジョンソンについて，「90年までの出場停止処分が解ければ，他の選手と同様に扱わなければならず，復帰は彼自身の意志による」と発言，バルセロナ五輪への出場は可能との判断を示した。また，薬物使用について周囲のコーチ・トレーナーの罪が重いとの見解を示す。	AP 読売	89. 4 89. 4.25
89. 4.24 ジャン・シャレ体育相（加）	サマランチ会長のジョンソン五輪出場可能の見解に反論し，ジョンソンは永久資格停止であることを再確認した。	トロント 読売	89. 4.24 89. 4.26
89. 4.24 カナダ政府特別調査委員会	ソウル五輪の薬物検査でジョンソンの尿から禁止薬物が検出された件で，「第三者による混入である」との陰謀説の調査を打ち切る。これにより同委員会はジョンソンの薬物使用を確認。	同上 同上	
89. 4.26 陸上2選手	カナダ政府調査委の公聴会で砲丸投げのピーター・ダジャ選手は，ソウル五輪以前からジョンソンの薬物使用を知っていたことを示唆。また，ソウル五輪四百mリレーのレース直前に帰国した短距離のマーク・マッコイ選手は，その理由を「薬物使用の発覚を恐れたためではなく，ジョンソンの失格後のコーチの発言が人種差別にもとずくもので納得できなかったため」とした。	AP 読売	89. 4.26 89. 4.28
89. 4.26 トロント・スター紙	ジョンソンの主治医アスタファン医師が，ドーピング事件の手記を雑誌に売り込み中であると報道。	時事AFP 同上	89. 4.26

年　月　日 発　言　者	要　　約	出　典	日　付
89. 4.27 グンター・コッホ医師	カナダ政府調査委の公聴会でジョンソンのコーチたちに薬物を供給したとされるカナダのコッホ医師は，79年から80年にかけ，カナダ女子短距離界の第一人者，イサジェンコ選手に筋肉増強剤を投与したことを証言。貧血と慢性疲労を訴えた同選手に対し，男性ホルモン誘導体のデポテストステロンを投与，80年からは筋肉増強剤のジアナボルに切り換えた。同医師はこれらの薬物が禁止薬物と知っており，フランシスコーチらに筋肉増強剤についての情報提供を行っていたと証言した。	AP 読売	89. 4.27 89. 4.29
89. 4.30 カナダオリンピック委員会 ロジャー・ジャクソン会長	ジョンソンのバルセロナ五輪出場は不可能との見解を示す。カナダオリンピック委員会の方針では，筋肉増強剤の使用者は次の五輪には出場できないとの姿勢。	AP 読売	89. 4.30 89. 5. 2
89. 5. 1 スターリング・ドラッグ社（加） ジョセフ・キーファー広報担当重役	カナダの製薬会社重役キーファー氏は，カナダ政府調査委員会で，ジョンソンの主治医アスタファン氏が85年6月から87年12月にかけて，犬，猫，馬用のステロイド，ウインストロルVの錠剤などを購入していたと証言。この時期は同医師がエストロゴルと呼ばれる薬物をジョンソンらに投与していた時期に一致。	トロント 読売夕	89. 5. 1 89. 5. 2
89. 5.10 カナダ政府調査委員会	アスタファン医師がジョンソンらに「エストロゴル」として投与していた薬物が，連邦研究所の分析の結果，家畜用ステロイドの商品名「ウインストロルV」，いわゆる禁止薬物のスタノゾロルである可能性大と判明。	トロント 読売夕	89. 5.10 89. 5.11
89. 5.24 アスタファン医師	カナダ政府調査委の公聴会に出席したアスタファン医師は，ジョンソンが同医師にはじめて会う83年以前の81年からステロイド剤を使用していたことを証言。また85年以降は「エストロゴル」の偽名のもと，日本の製薬会社のステロイド剤を飲ませていたと述べた。	トロント 読売	89. 5.24 89. 5.25
89. 5.25 アスタファン医師	調査委員会の公聴会で同医師は，ジョンソンが自ら薬物の使用を認める電話での会話の録音テープを提出，「禁止薬物と知りながら使用したことはない」とするジョンソンの主張を否定。また，ソウル五輪百m決勝の3週間前までアナボリックステロイドを使用していたことも証言。	トロント 読売	89. 5.25 89. 5.27
89. 5.26 アスタファン医師	調査委員会の公聴会で同医師は，ジョンソンが性的興奮を促す丸薬を同医師に無断で常備していたと証言。筋肉増強剤の副作用として性的欲望が減退するのを抑制する効果がこの薬物にはあると語った。	ロイター共同 読売	89. 5.26 89. 5.28
89. 5.27 トロント・サン紙	カナダ・オンタリオ州当局はベン・ジョンソンが，同州の運営するアマチュアスポーツ選手のための信託資金を，86年に一部不正流用した疑いがあるとして調査を開始したと報道。	時事 読売	89. 5.27 89. 5.27
89. 5.30 アスタファン医師	調査委員会公聴会で同医師は，自らが脅迫を受けていることを明らかにした。同日の証言では，85年トロントで東独の選手とビタミン剤と筋肉増強剤の「フラザボル」とを交換したことを明らかにした。	AP 読売	89. 5.30 89. 6. 1
89. 6. 5 国際陸連ルングクビスト医事委員長	ジョンソンが87年の世界選手権でマークした9秒83の世界記録（レース後の尿検査の結果は陰性）について，当時ジョンソンが薬物使用中であったことが証明された場合を考慮し，尿検査の結果以外から記録の取消ができるかなど法律家を交えて検討にはいると述べた。	AP 読売	89. 6. 5 89. 6. 7

年 月 日 発 言 者	要 約	出 典	日 付
89. 6.12 ベン・ジョンソン	調査委員会で証人に立ったジョンソンは，禁止薬物と知りながらステロイドを服用していたことを認めた。81年から83年までダイアナボル82年からはフランシスコーチからウインストロルをもらって服用していたと述べた。また83年からはアスタファン医師から禁止薬物の注射を受け，85年からはマイアトロンをもらったと証言した。なお，薬剤の副作用，身体から排せつされるまでの期間については，コーチ，医師からは説明を受けていなかったと主張。	トロント 読売夕	89. 6.12 89. 6.13
89. 6.13 ベン・ジョンソン	調査委員会でジョンソンは，9秒83をマークした87年の世界選手権前にもエストラゴル（マイアトロン）を使用していたと認めた。87年の6～7月にかけて2週間にわたり同薬剤を渡したとするフランシスコーチの証言を認めたもの。しかし，同選手権の14日前まで薬物を使用していたかという質問については否定。さらに，五輪直後の薬物使用否定声明については，「家族，友人，他のカナダ選手らを辱めないため」と釈明。ソウル五輪前の使用状況については，8月24日にフランシスコーチから，25日，28日にアスタファン医師からエストラゴルの注射を受けたことを明らかにした。席上，再度チャンスを与えられれば，薬物を使用せずにカナダ代表としてオリンピックに参加したいと嘆願した。	トロント 読売 読売夕	89. 6.13 89. 6.14 89. 6.14
89. 6.13 英国オリンピック協会 アーサー・ゴールド会長	薬物使用を認めたジョンソンは陸上界から追放すべきとの見解を示した。	時事 読売夕	89. 6.13 89. 6.14
89. 6.13 ジャン・シャレ体育相（加）	同相は，ジョンソンの証言を勇気あるものと評価し，同選手のカナダ代表としての復活がありうることを示唆した。	トロント 同上	89. 6.13
89. 6.14 国際陸連・ホルト事務局長	ジョンソンが87年の世界選手権時に禁止薬物を使用していたことを認めたのを受け，同会長はこのときにマークした9秒83の世界記録を，9月の評議会で再検討することを明らかにした。	AFP時事 読売	89. 6.14 89. 6.15
89. 6.13 カール・ルイス選手	CBCテレビの番組内で，ジョンソンの証言を支持し，2年間の出場停止処分が解ければ復帰を許すべきだとの見解を示した。	AP 同上	89. 6.13
89. 6.16 IOCサマランチ会長	サマランチ会長は「タイムズ」紙のインタビューの中で，今後薬物使用の選手にはより厳しい処罰を科すような規則改正を検討していくが規則が改正されても，さかのぼってこれをジョンソンに適用することはないと語った。	AP 読売	89. 6.16 89. 6.17
89. 8.21 プリモ・ネビオロ会長	同会長は9月の総会で，ドーピングを認めた選手の記録の抹消などの規則改正を検討していると語った。この改正ではドーピングの時期にさかのぼって記録を抹消することが可能になり，ジョンソンの9秒83の世界記録も抹消の見通し。	AP 読売	89. 8.21 89. 8.23
89. 9. 1 国際陸連評議員	この評議員はジョンソンの9秒83の記録をさかのぼって抹消することはないだろうとの見解を示した。	時事AFP 読売	89. 9. 1 89. 9. 3
89. 9. 4 国際陸連評議員会	同評議会は87年にジョンソンがマークした9秒83の世界記録を，翌年1月に発行される世界記録リストから抹消する方針を決めた。この方針を含む薬物関連の規則改正は総会で正式決定の予定。これにより男子百mの世界記録は，ソウル五輪でのカール・ルイスの9秒92となる。	共同 読売	89. 9. 4 89. 9. 5

年　月　日 発　言　者	要　　約	出　典	日　付
89. 9. 5 国際陸連総会	総会はさきに評議会で決定した，禁止薬物使用の新規則を承認。これにより，ジョンソンの百m世界記録の9秒83は正式に抹消されることになった。新規則ではレース後の検査にパスしていても，後に公的機関で宣誓・署名の上，本人が薬物使用を認めたときは過去6年にさかのぼって罰則を科すことができる。	共同 読売	89. 9. 5 89. 9. 6
89. 9. 5 ベン・ジョンソン	ジョンソンはイタリアの「ガッゼタ・デロ・スポーツ」紙のインタビューで，自分一人が反ドーピング運動の犠牲になっていると強い不満を示した。	AP 同上	89. 9. 5
89.10. 2 サイド・アウィータ選手	陸上1500，3000m等の世界記録保持者，モロッコのアウィータ選手は国際陸連によるジョンソンへの2年間の出場停止処分を批判し，一時的な処分にとどまる限り薬物問題は解決しないと述べた。	ロイター共同 読売	89.10. 2 89.10. 4
89.10 ベン・ジョンソン	米国下院の薬物規則強化法案審議に出席したジョンソンは，薬物使用の責任を自ら取り，二度と同じ過ちを犯さないと発言。	AP 読売	89.10 89.10.10
89.11.17 IOCメロード医事委員長	同委員長はジョンソンの出場停止処分が解ける90年9月以降は，彼の国際競技会への復帰を認めるべきとの見解を示した。	AP 読売	89.11.17 89.11.19
89.12.28 国際陸連・マイク・ギー技術部長	同氏は89年末限りで抹消される予定だったジョンソンの男子100m世界記録9秒83を，90年1月19，20日の国際陸連評議員会まで残すことを明らかにした。	AP 読売	89.12.28 89.12.30
90. 1.17 国際陸連プリモ・ネビオロ会長	90年9月にジョンソンの出場停止処分が解けた後は，競技会に復帰できると言明。カナダ陸連が同選手の永久追放を決めている件については，「カナダ陸連の問題には口をはさむつもりはない」と述べた。	東京 読売	90. 1.17 90. 1.18
90. 1.20 国際陸連評議員会	評議会でジョンソンの百m世界記録9秒83（87年）には正式に抹消された。同時に同選手の室内50mの5秒55，室内60mの6秒41の各世界記録も抹消された。これにより，百mの世界記録はカール・ルイスの9秒92（ソウル五輪，88年）。	東京 読売	90. 1.20 90. 1.21
90. 4. 2 英国陸協	ジョンソンの出場停止処分が解ける90年9月以降も，英国内での招待競技会には出場させない方針を確認。ただし，ジョンソンがカナダ代表として英国入りする場合だけは出場可能とした。	ロイター共同 読売	90. 4. 2 90. 4. 3
90. 6. 1 カナダ陸連 ポール・デュプレ会長	同会長はラジオのインタビューに対し，ジョンソンはカナダ政府からの無期限資格停止を受けているが，国際陸連によるジョンソンの出場停止処分の解ける9月以降は，復権させる見通しを示した。	UPI共同 読売	90. 6. 1 90. 6. 2
90. 8. 2 ベン・ジョンソン	フランスの「レキップ」紙のインタビューに，91年はじめにレースに復帰し，最大の目標は91年世界選手権と，92年バルセロナ五輪で勝つことと述べた。	ロイター 読売	90. 8. 2 90. 8. 3
90. 8. 4 ベン・ジョンソン	モントリオールでのカナダ陸上選手権を観戦したジョンソンは，91年1月にレースに復帰することを言明。それまでの5カ月間で体調を万全に整えると語った。	AP 読売	90. 8. 4 90. 8. 7
90. 8. 9 マルセル・ダニ体育相（加）	90年9月にジョンソンの国際陸連による資格停止処分が解ければ，競技会復帰を認めると表明。国際陸連，カナダ陸連はすでに復帰に合意しており，カナダ政府の合意でジョンソンの復帰への障害はすべてなくなった。	トロント 読売	90. 8. 9 90. 8.10

年　月　日 発　言　者	要　　約	出　典	日　付
90. 8. 9 ベン・ジョンソン	ジョンソンは自宅で記者会見し，カナダ政府の復帰合意を喜ぶとともに，91年1月の室内競技会への復帰，92年のバルセロナ五輪での金メダル獲得に向け，意欲を示した。	AP 読売	90. 8. 9 90. 8.11
90. 9.10 ベン・ジョンソン	スポンサー契約のために訪れたイタリアで記者会見に応じたジョンソンは，91年1月11日にトロントで開催される室内競技会・50mで復帰することを明らかにした。また同年の世界選手権（東京）では，「コンディション次第で9秒90をマークできると思う」など復帰に自信をのぞかせた。	ロイター 読売夕	90. 9.10 90. 9.11
90. 9.24	ジョンソンに対して科されていた，国際陸連による2年間の出場停止処分が9月24日に解かれた。ジョンソンは91年1月11日カナダの室内陸上競技会で復帰の予定。	ロイター 読売	90. 9.24 90. 9.26
90. 9.28 カナダオリンピック協会	同協会は理事会の席上，24日で国際陸連の出場停止処分の解けたベン・ジョンソンの五輪出場を許可する決定を下した。	AP UPIS時事 読売夕	] 90. 9.28 90. 9.29
90.10. 8	ジョンソンが91年2月11日の国際室内陸上（大阪）に出場することが決まった。これは復帰後，日本での最初の競技会。	読売	90.10. 9
90.10.16 ベン・ジョンソン	大阪でのインタビューに応じたジョンソンは，復帰を喜ぶとともに，復帰までの苦労を語った。また，時間はかかると前置きしながらも，ルイスの9秒92の百m世界記録を破る自信を見せた。さらに，薬物使用については，自分を教訓とし，特に子供たちには，よくないことだと学びとってほしいと語った。	大阪 読売	90.10.16 90.10.17
90. 1. 1	91年8月の世界選手権（東京）に関連し，ルイスとジョンソンの現況を扱った特集記事が掲載された。	読売	91. 1. 1
91. 1. 9 ベン・ジョンソン	読売新聞社とのインタビューでハミルトン室内競技会での復帰を前にしたジョンソンは，現在の心境について落ち着いて集中していると述べた。また，仕上がり具合いはよいとしながらも，レース特有の緊迫感からしばらく離れていることへの不安ものぞかせた。復帰を目前に11日の室内競技会を重要なレースと位置づけ，最大の目標は世界選手権（東京），バルセロナ五輪であると決意を述べた。	トロント 読売	91. 1. 9 91. 1.10
91. 1.11 復帰第一戦	2年5カ月ぶりにハミルトンでの室内陸上競技会50mに参加したジョンソンは，5秒77で2位に終わった。今後，ロサンゼルス，オタワの大会に出場した後，2月の大阪での国際室内陸上に参加する。	ハミルトン 読売夕	91. 1.11 91. 1.12
91. 6. 3 カナダ・オンタリオ州医師会	ジョンソンら陸上選手に筋肉増強剤を処方したアスタファン医師に対して，資格停止1年6カ月と罰金5千カナダドルを科した。	AP 読売	91. 6. 3 91. 6. 5
91. 6.23 国際競技会（フィンランド）	同競技会で百mに出場したジョンソンは，10秒40の4位に終わり，百mは復帰後4戦目で依然優勝なし。世界選手権の参加標準記録A（10秒30）も突破できていない。	共同 読売	91. 6.23 91. 6.26
91. 7.17 アザンマネージャー	ジョンソンのマネージャー，アザン氏は百mで低迷する同選手について，世界選手権で百mに出場することを断念し，四百mリレーのカナダ代表入りを目指すとの本人の見解を語った。	AP 読売	91. 7.17 91. 7.18

年　月　日 発　言　者	要　　約	出　典	日　付
93. 3. 3 トロント・スター紙	1月の競技会の際に行われた尿検査で，ジョンソンの尿からテストステロンが検出されたと報道した。ジョンソンはこの件について同紙の取材には「ノーコメント」とだけ回答。	トロント 読売	93. 3. 3 93. 3. 4
93. 3. 3 ベン・ジョンソン	一月半ばの尿検査で筋肉増強剤が検出されたと報道されたジョンソンは，弁護士を通じ，復帰後禁止薬物を使用したことはないと疑惑を否定した。また，カナダ陸連も同選手の検査結果が陽性であったとの報告は受けていないと発表，疑惑を否定した。	トロント 読売夕	93. 3. 3 93. 3. 4
93. 3. 5 国際陸連	国際陸連はジョンソンを薬物使用の再犯により，陸上競技会から永久追放すると発表した。1月半ばの尿検査で禁止薬物のテストステロンが基準を超える高い数値で検出されていることが認められたため。	ロイター 読売	93. 3. 5 93. 3. 6
93. 3. 5 ベン・ジョンソン	薬物使用の再犯で国際陸連から永久追放処分をうけたベン・ジョンソンは，弁護士を通じ，禁止薬物の使用を否定する声明を発表。	トロント 読売夕	93. 3. 5 93. 3. 6
93. 3. 5 カナダ政府	カナダ政府は，ジョンソンのスポーツ基金受給資格の取消と，すべてのスポーツ競技からの追放を発表した。	同上 同上	
93. 3. 5 カナダ陸連	ジョンソンから検出されたテストステロンは基準の10倍にのぼると認めた。	ロイター 読売	93. 3. 5 93. 3. 7
93. 3. 7 ベン・ジョンソン	同選手は弁護士を通じ声明を発表，陸上界からの引退を表明した。国際陸連の処分に対しては，費用面や家族に対する責務を考慮し，異議申し立てはしないと表明した。	ロイター共同 読売夕	93. 3. 7 93. 3. 8
93. 3.10 ベン・ジョンソン	陸上界からの永久追放の処分を受けたジョンソンは，オーストリアの「クリア」紙に対し，カナディアンフットボールのチームから勧誘があり，転向の意志があると語った。	ロイター 読売	93. 3.10 93. 3.12
93. 3.17 ベン・ジョンソン	イタリアのTG5テレビのインタビューに対し，サッカーへの転向の意志も示した。	ロイター 読売	93. 3.17 93. 3.19

表7　カトリン・クラッベのドーピング事件の経緯

年　月　日 発　言　者	要　　約	出　典	日　付
92／2／7 ドイツ陸上連盟（陸連）	カトリン・クラッベ，グリット・ブロイアー，ジルケ・メラーの3選手について，1月に南アフリカ共和国で行われたトレーニングの際に実施したドーピング検査で，疑わしい反応がでたため，当面の競技活動を停止する処分を出した。	共同 読売	92／2／7 92／2／8
92／2／8 ドイツ陸連	ドイツ陸上連盟の法務委員会に3選手が異議を申し出ていたため，再検査の結果判明まで3選手の競技活動を認める方針に転換した。再検査は，8日に実施された。	共同 読売	92／2／8 92／2／9
92／2／9 ドイツ陸連	再検査の結果，3人のサンプルが完全に一致し，3つの尿サンプルが同一人物から採取された可能性が強いことを示唆し，疑惑解明のため検査を継続していく方針であることを明らかにした。	共同 読売	92／2／9 92／2／10
92／2／9 カトリン・クラッベ	カールスルーエで開かれたドイツ室内選手権の60m決勝で優勝。「南アフリカでの検査は（ドイツ国内と）手順が違っていた。我々3人は潔白で，何も不正はしていない」と疑惑を否定した。	共同 読売	92／2／9 92／2／10
92／2／10 マンフレト・ドニケ	ケルン・スポーツ大学のマンフレト・ドニケ博士は，「3人の検体分析結果は完全に一致した。これは，明らかに検査をごまかすための不正行為があったことを示す」とし，検体を採取した南アフリカ関係者による不正は，考えられないと否定した。	共同 読売	92／2／10 92／2／11
92／2／10 ディーター・バロン	ドイツ陸上連盟反ドーピング委員会議長のディーター・バロン氏は，「同じ物を飲食し，同じ状況で採取されたサンプルが非常に類似することがある」とし，選手の不正行為を否定する見解を示した。	AFP時事 読売	92／2／10 92／2／12
92／2／11 ドイツ陸連	尿サンプル分析結果をめぐる専門家の意見が大きく割れていることから，ドイツ陸上連盟は3選手の処分を決めかね，2月22日に開催される6カ国対抗選手権にクラッベらを参加させると発表した。	共同 読売	92／2／11 92／2／13
92／2／11 カトリン・クラッベ	12日付ドイツ紙「ビルト」とのインタビューで，「私もコーチも不正はしていない」と改めて潔白を主張した。「旧西ドイツには旧東ドイツ出身の私をやっかむ人間がたくさんいる」と述べ，検査に悪意の工作が施された可能性も否定できないとの見解を示唆した。	共同 読売	92／2／11 92／2／13
92／2／14 ドイツスポーツ連盟	ドイツ・スポーツ連盟は，カトリン・クラッベが，5日に行われたドーピング検査で陰性反応が出たことを明らかにした。	時事AFP 読売	92／2／14 92／2／15
92／2／15 ドイツ陸連	ドイツ陸上連盟は，検査をごまかした疑いのあるカトリン・クラッベらを，4年間資格停止処分としたと発表した。	時事AFP 読売	92／2／15 92／2／16
92／2／15 ドイツ陸連	トーマス・シュプリングシュタインコーチもドイツ陸上界から追放処分とした。「検査は何者かに操作されたことは疑う余地もない。薬物使用の発覚を逃れようとして選手も承知の上で行われた」と非難し，今回の検査サンプルが，昨夏の世界選手権前の7月にカトリン・クラッベらから採取された尿と同一であることも指摘。	共同 読売	92／2／15 92／2／17
92／2／16 ドイツ陸連	ドイツ陸上連盟のマイヤー会長は，クラッベら3人に対して科した4年間の出場停止処分について，1ケ月の不服申立期間を与えると述べた。	時事 読売	92／2／16 92／2／17

年　月　日 発　言　者	要　　約	出　典	日　付
92／2／16 ドイツ連邦議会（下院）	ドイツ連邦議会スポーツ委員会のティルマン委員長は，16日付の同国紙で，スポーツ選手のドーピング禁止法の施行に取り組む考えを明らかにした。クラッベらの薬物疑惑の事態を重く見たもので，同委員会のラムブリヌス副委員長も「ドーピングを犯罪とみなさなければならない」と述べた。	時事 読売	92／2／16 92／2／17
92／2／16 トーマス・シュプリングコーチ	トーマス・シュプリングコーチは，「法廷に出ることも含め，法的救済が受けられるよう全力を挙げる」と処分撤回へ強い姿勢を表明した。	UPI共同 読売	92／2／16 92／2／18
92／2／17 ドイツ陸連	91年7月国内で実施したドーピング検査でも，同一人物の尿サンプルが提出されていたと発表した。	時事 読売	92／2／17 92／2／19
92／2／18 ドイツ社会民主党（SPD）	ドイツ社会民主党は，最高2年の懲役を含む厳しい法案の制定を要求する考えのあることを明らかにした。政府，ドイツオリンピック委員会などは，法的な罰則の制定には拒否の姿勢を示した。	AP 読売	92／2／18 92／2／20
92／2／20 カトリン・クラッベ	カトリン・クラッベは，処分後初めて練習を行い，「裁判で勝てると確信しており，練習を続ける」「1月の南アフリカでの検査は通常と手順など違っていた」と検査ミスを強調した。	時事 読売	92／2／20 92／2／21
92／2／20 マリーン・オッティ	オッティ（ジャマイカ）のコーチのレイモンド・デブリースは，「クラッベの選手資格剥奪が確定すれば，クラッベを告訴する」とドイツ紙に語った。「オッティは，二位以上ならボーナス，広告契約を手に出来た。」	時事AFP 読売	92／2／20 92／2／22
92／2／21 カトリン・クラッベ	カトリン・クラッベら女子3選手は，弁護士を通じてドイツ陸連に正式な抗議文書を提出した。	ロイター共同 読売	92／2／21 92／2／23
92／2／23 カトリン・クラッベ	初めてテレビのインタビューに応じ問題の尿サンプルは，何者かに操作されたと主張した。それが誰であるかは分かっているが，明らかに出来ないと言う。尿サンプルを南アフリカからドイツに輸送する際，封印がしていなかった事実を挙げ，その間に何らかの不正があったとしている。	ロイター 読売	92／2／23 92／2／25
92／2／29 ミュンツアー氏	ドイツ陸連元会長のミュンツアー氏は，「寛容さは，法に優先するとし，東では，ドーピングは当たり前だった。子どもの頃から医師やトレーナーらに誤った指導をされた。4年もの出場停止は，彼女の人生まで台無しにしかねない。謝罪さえすれば許してやるべきだ」と述べた。	ロイター 読売	92／2／29 92／2／29
92／3／2 ドイツ陸連	ドイツ陸上連盟のスポークスマンは，カトリン・クラッベら3選手に対する公聴会を今月中に開催し，薬物使用や検査のごまかしの容疑を本人に問いただす方針を明らかにした。	時事 読売	92／3／2 92／3／3
92／3／5 エンデ・ビンデマン	5日付のドイツ紙「ビルト」は，南アフリカで採尿に立ち会った女医のエンデ・ビンデマンの「不正が行われたはずがない」との見解を載せた。	時事 読売	92／3／5 92／3／6
92／3／6 エレン・ビンデマン	無実を証明する人物としてドイツ紙で報道されたエレン・ビンデマンは，6日ドイツ通信などに対して，「私は，そのようなことは話していない」と述べ，同報道を否定した。	時事 読売	92／3／6 92／3／7

年　月　日 発　言　者	要　　約	出　典	日　付
92／4／2 ドイツコール首相	コール首相は，冬季五輪選手団の慰労会の席上，ドーピング疑惑で4日にドイツ陸連の最終処分が決まるカトリン・クラッベらに関連して，「バランスのとれた念入りな調査が必要だ」と要望した。	ロイター 読売	92／4／2 92／4／4
92／4／2 ドイツ陸連	ドーピング検査について一部であった事前の検査通告を全廃し，全くの抜き打ち検査とし，検体の不正操作の疑いがあれば，直ちに追加検査することを決めた。	ロイター，時事 読売	92／4／2 92／4／4
92／4／4 国際陸連	ドイツ陸連から4年間の資格停止処分を受けたカトリン・クラッベら3選手の異議申し立てが認められなかった場合，資格停止処分の期間は，2年になるだろうと発表。	UPI共同 読売	92／4／4 92／4／5
92／4／5 ドイツ陸連	ドイツ陸連の法政委員会は，3選手の4年間の資格停止処分を撤回すると発表。法政委員会のエミク委員長は，「尿サンプルへの不正行為を証明できるような十分な証拠がない」疑わしきは罰せずの結論を示した。	ロイター 読売	92／4／5 92／4／6
92／4／6 国際陸連	ドイツ陸連の取り消し決定に，国際陸連のヨンクヴィスト副会長（医事委員長）は，「決定に対して，当惑している。ドイツ陸連が心変わりするような新事実は見つけられない」と語った。3選手が国際大会に参加するためには，国際陸連がドイツ陸連の決定を承認することが必要となる。	読売 読売	92／4／6 92／4／7
92／4／8 カトリン・クラッベ	資格停止処分が撤回され，5月28日の旧東ドイツのイエナで開かれる大会で競技復帰するとマネージャーが発表。	ロイター 読売	92／4／8 92／4／9
92／4／27 ゴールドウェル	ゴールドウェル社は，27日スポンサー契約を結んでいるクラッベについてドイツ陸連に対して訴訟を起こす意向を明らかにした。	ロイター 読売	92／4／28 92／4／28
92／4／28 欧州の主要陸上大会の主催者	クラッベを招待しないことを明らかにした。	ロイター 読売	92／4／28 92／4／28
92／5／27 サマランチ会長	27日付のドイツ週刊誌でのインタビューでIOCサマランチ会長は，クラッベの五輪出場を支持し，「証拠不十分で無罪」と決めたドイツ陸連の決定を尊重すべきだとの考えを示した。	読売 読売	92／5／28 92／5／28
92／5／31 国際陸連	トロントで開いた評議員会の審議で，カトリン・クラッベら3選手の薬物疑惑について近日中に調停委員会を開いて結論を下すことに決めた。	共同 読売	92／5／31 92／6／2
92／6／3 カトリン・クラッベ	13日ドイツ・メクレンブルクフォアポンメルン州選手権大会に出場すると発表した。疑惑発生以来初の公式競技会。国際大会の出場は停止されているが，国内の出場は可能。	時事 読売	92／6／3 92／6／4
92／6／13 カトリン・クラッベ	薬物疑惑以来初めての競技会で，低調なタイムであった。	ロイター共同 読売	92／6／13 92／6／14
92／6／17 カトリン・クラッベ	「自律神経失調で好成績が望めない」ことを理由にバルセロナ五輪選考会を兼ねたドイツ陸上選手権大会に出場しないと発表。	時事 読売	92／6／17 92／6／18
92／6／18 ドイツ陸連	ドイツ陸連がドーピング疑惑に対して，一度出した結論を翻して「シロ」としたが，国際陸連の待ったがかかり，ドイツ陸連の法律担当者が，「我々の決定が全く尊重されていない」として辞任する。	読売 読売	92／6／18 92／6／19

年　月　日 発　言　者	要　　約	出　典	日　付
92／6／27 国際陸連	27日ロンドンの国際陸連本部でカトリン・クラッベら3選手の事情聴取が始まった。事情聴取は，3人の国際陸連のメンバーによる非公開の裁定員会で行われた。	読売 読売	92／6／27 92／6／29
92／6／28 国際陸連	国際陸連調停委員会は，カトリン・クラッベら3選手を，何ら処分を科さないと言う裁定を発表した。	ロイター・共同 朝日	92／6／28 92／6／29
92／6／29 マスコミ	国際陸連の「無罪」裁定を，旧西ドイツのマスコミは「問題があるにもかかわらず，国際陸連裁定委員会は，ドイツ陸連のシロ判定を訂正することが出来なかった」と報じた。旧東ドイツのマスコミは，クラッベ側に味方する記事を載せ続けた。「沈黙」の東と「追求」の西の分裂が浮き彫りになった。	朝日 朝日	92／6／29 92／6／30
92／6／30 ドイツオリンピック委員会	ドイツオリンピック委員会は，フランクフルトで開いたバルセロナ五輪出場選手選考会議で，国際陸連の「無罪判決」を受けたカトリン・クラッベら3選手のドイツ代表五輪選手として選んだ。	時事 毎日	92／6／30 92／7／1
92／7／2 ドイツスポーツ連盟	カトリン・クラッベら3選手に対して，トレーニングの前後に尿サンプルを採取する方法でドーピング検査が行われた。ドーピング対策担当のユルゲン・バート氏は，「この2度のテストはサンプルの不正操作を防ぐためだ」と話している。	ロイター共同 読売	92／7／2 92／7／3
92／7／3 カトリン・クラッベ	ドイツオリンピック委員会のダウメ委員長は，カトリン・クラッベら3選手が「心理的な圧迫と練習不足で好成績は望めない」と出場断念の正式通知を行ったことを明らかにした。	時事 毎日	92／7／3 92／7／4
92／8／4 ドイツ陸連	ドイツ陸連の幹部は，カトリン・クラッベとグリット・ブロイアーが，最近のドーピング検査で陽性反応がでたことを明らかにした。	ロイター 読売	92／8／4 92／8／5
92／8／5 トーマス・シュプリングシュタイン	トーマス・シュプリングシュタインコーチは，ドイツの日刊紙ドレスデナー・モルゲンポストに6日掲載予定のインタビューでクラッベが筋肉増強剤と興奮剤を使用したことを認め，彼女はその薬が禁止薬物であるとは知らずにいると語った。何も問題は無いという医師のアドバイスで薬物を使用していたと語った。	ロイター 東京	92／8／5 92／8／6
92／8／5 カトリン・クラッベ	「ビルト」紙の6日付のインタビューで，筋肉増強に関係する薬品を使用したが，それは禁止薬物リストに含まれていないと教えられていた，との事実を明らかにした。「4月16日からこの薬を使ってきた。医師からドーピングリストにない薬だからOKと言われた」と語った。	ロイター共同 毎日	92／8／5 92／8／7
92／8／11 ノイブランデンブルグ・スポーツクラブ	カトリン・クラッベに禁止薬物を与えたとして，トーマス・シュプリンクシュタインコーチを解雇した。	ロイター共同 毎日	92／8／11 92／8／12
92／8／14 ドイツ陸連	14日に行ったドーピング再検査の結果，2選手とも陽性反応が示され，検出薬は，クレンブテロールであったと発表した。	ロイター 読売	92／8／14 92／8／15
92／8／14 ドイツ陸連	カトリン・クラッベらに対して，ドイツの国内大会への出場禁止を発表。	共同 読売	92／8／14 92／8／15
92／8／19 カトリン・クラッベ	19日付のドイツ週刊誌「スーパー・イル」のインタビューで「ドーピングには自分にも責任がある」と，単にコーチの指示だけで知らずに使用したのではないことを認めた。	時事 読売	92／8／19 92／8／20
92／8／19 ナイキ	アメリカのスポーツメーカーの「ナイキ」は，クラッベとのスポンサー契約を解除した。	AP 読売	92／8／19 92／8／20

年　月　日 発　言　者	要　　約	出　典	日　付
92／9／11 ドイツ陸連	ドルトムントで開いた幹部会で7月に4回行ったドーピング検査で，カトリン・クラッベとグリット・ブロイアーの両選手のドーピング違反を確認，二人を4年間の出場停止処分にすることを決めた。	共同 毎日	92／9／11 92／9／12
92／9／29 ノイブランデンブルク・スポーツクラブ	クラブ首脳は，カトリン・クラッベを除籍にすることを決めたことを明らかにした。	UPI共同 毎日	92／9／30 92／10／2
93／3／18 ドイツ陸連筋	クラッベの使用した薬は，「スピロペント」の錠剤で，科学的研究の結果，使用した薬物は，筋肉増強剤ではないことが裏付けられたと語った。	ロイター 朝日	93／3／18 93／3／19
93／3／30 ドイツ陸連	ドイツ陸連の調停委員会は，カトリン・クラッベ，グリット・ブロイヤー両選手の処分を1年間に短縮する事を明らかにした。「ドーピング規定に違反したことは証明できないが，スポーツ精神に反して薬物を使用した」としている。	朝日 朝日	93／3／30 93／3／31
93／3／30 国際陸連事務総長	国際陸連のギュライ事務総長は，ドイツ陸連の決定に対して否定的な見解を表明した。	時事AFP 読売	93／3／30 93／4／1
93／3／31 カトリン・クラッベ	記者会見で，処分解禁を8月13日の深夜に定めたことは，8月14日に開催される世界選手権の参加資格を得るためのレースに出られないように，その日付にこだわった」とドイツ陸連を非難した。	ロイター 読売	93／3／31 93／4／1
93／4／23 国際陸連	クラッベに関する調停会議を，5月，ドイツのシュツットガルトで行うことを明らかにした。	AP 読売	93／4／23 93／4／25
93／5／25 国際陸連	国際陸連ネビオロ会長は，世界選手権前に処分は解かず，結論が確定するまでもつれ込む可能性を示唆した。	時事AFP 読売	93／5／25 93／5／27
93／7／9 ドイツ陸連	ドイツ陸連のディーゲル会長は，国際陸連に対し，最終出場停止期間が決定していないカトリン・クラッベの処分を，8月の世界選手権（シュツットガルト）までに早急に決定するよう要請した。	ロイター 朝日	93／7／9 93／7／11
93／8／22 国際陸連の消息筋	シュツットガルトで開いた評議員会でカトリン・クラッベを，93／8／23～2年間の資格停止処分とすることを決めた。	AFP時事 読売	93／8／22 93／8／24
93／8／26 ドイツ陸連	国際陸連が2年間の資格停止にしたことに対して，その撤回を求め，国際陸連の調停委員会に正式に提訴した。	DPA時事 読売	93／8／26 93／8／28
93／9／6 カトリン・クラッベ	6日付の英国紙で来年の欧州選手権のドイツ国内予選に出場する意向を示した。	AFP時事 読売	93／9／6 93／9／8
93／10／9 国際陸連	11月20～22日に行われる調停委員会でカトリン・クラッベら3選手に，反論の場を設定することにした。	ロイター 読売	93／10／10 93／10／10
93／11／20 国際陸連	モナコで開いた調停委員会でカトリン・クラッベら3選手に対し，薬物使用にまつわる不明朗な行為を理由として，95年8月まで2年間の資格停止処分を発表した。	ロイター 読売	93／11／20 93／11／22
95／4／5 カトリン・クラッベ	カトリン・クラッベは，ドーピング違反で2年間の資格停止処分を受けたことに対し，国際陸連とドイツ陸連を相手に，少なくとも78万1000マルク（約5000万円）の損害賠償を求める訴訟を起こした。	AP 毎日	95／4／5 95／4／7
95／5／17 ミュンヘン地方裁判所	ミュンヘン地方裁判所は，カトリン・クラッベに対する資格停止処分を不当とし，国際陸連とドイツ陸連に対して損害賠償の支払いを命じる判決を下した。両陸連は控訴する予定。損害賠償金として400万マルク（約2億5000万円）を請求している。	AP 毎日	95／5／17 95／5／18

表8　中国選手の大量ドーピング事件の経緯

年　月　日 発　言　者	要　　約	出　典	日　付
94／10／14 アジアオリンピック評議会（OCA）医事委員長黒田善雄	「（アジア大会の薬物検査において）水泳金メダリストに妙な薬物が出現。禁止薬物ではないが，今後関係者が検討する」	神戸新聞	94／10／14
94／10／14 国際陸連	中国の女子円盤投げの選手が陽性反応が出たことを確認。	読売	94／10／15
94／10／16 黒田善雄OCA医事委員長	「今までの検査では陽性者はいない」と発表。	読売	94／10／16
94／11／16 シカゴ・トリビューン	「（FINAの抜き打ち検査で）Yang Aihua陽性反応」FINA医事委員長リチャードソンのインタビュー紹介。	ロイター 読売	94／11／16 94／11／17
94／11／16 国際水泳連盟（FINA）リチャードソン医事委員長	Yang Aihuaの陽性反応認める。他にも陽性反応者がいることを示唆。医事委員会は，FINA理事会に対して適切な処罰を課すよう勧告した。	AP 朝日	94／11／16 94／11／17
94／11／16 中国水泳協会	「FINAから最終的な通知をまだ受けていない。ノーコメント。」	ロイター 東京	94／11／16 94／11／17
94／11／17 中国外務省スポークスマン	「（Yang Aihuaの陽性反応に関する報道について）検査を何度も受けてきている。一度も禁止薬物が見つかったことはない。ドーピング検査の陽性反応はハードトレーニングによるものだ。」	朝日	94／11／18
94／11／17 FINAウェルナー専務理事	「（リチャードソンの発言に対して）最終報告は受けていない。公式結果もまだない。」	AP 朝日	94／11／17 94／11／18
94／11／17 FINAリチャードソン医事委員長	「FINA抜き打ち検査の結果は，T／ET比がAサンプルが1：9，Bサンプルでは1：15であったと聞いている。これはIOCの基準である1：6を大幅に上回っている。抜き打ち検査のねらいは中国選手だった。他の選手についても検査中だ。」	読売	94／11／18
94／11／22 中国国家体育運動委員会	「Yang Aihuaの陽性結果認める。FINAの規定に基づく処罰を受ける用意がある。釈明の回答をする必要はない。」	AP 読売	94／11／17 94／11／18
94／11／23 FINA	「FINA理事会は，中国のYang Aihuaに，9月30日に広島で行った抜き打ち検査で高比率のテストステロンが検出されたため，規定により2年間の資格停止処分とする。」	読売	94／11／24
94／11／24 中国水泳協会	「Yang Aihuaは，2年間，国際・国内の競技参加を禁止する。」	毎日	94／11／25
94／11／24 中国外務省スポークスマン	Yang Aihuaの陽性反応について「中国オリンピック委員会は，FINAの処理に応じ，国内の規定に基づき，処理する。薬物濫用は個人的な行為。中国オリンピック委員会は反ドーピングの立場を明らかにしており，IOCなどと協力している。」	読売	94／11／25
94／11／24 中国水泳協会関係者	「Yang Aihuaは無実を主張している。『自分は無実でありFINAの処分は不当だ』と抗議する文書を送った。」	時事 読売	94／11／24 94／11／25
94／11／24 アジア大会組織委員会立川理事	「Yang Aihuaの処分に伴う記録・メダルの扱いについてはFINAの裁定に従う。」	読売	94／11／25
94／11／26	大会期間中の検査で，1名の競泳選手が陽性だったことが判明。Bサンプルの検査が実施されている。	東京	94／11／27
94／11／27 アジア大会関係者	競泳，陸上，ボートなどの種目に参加した中国選手合計11名がAサンプルで陽性の反応を示したため，Bサンプルの検査が実施される。	読売	94／11／28

年　月　日 発　言　者	要　　約	出　典	日 付
94／11／28 OCAムタレブ事務局長	「(中国選手11人のAサンプル陽性について) 結果は黒田から聞いた。最終検査の結果が後日届くのでそのときOCAの公式見解を発表する。」	朝日	94／11／29
94／11／28 国際陸連	バルセロナでの評議員会で，ドーピング検査の陽性反応は今後，一次検査（Aサンプル検査）終了段階で検査結果を公表することを決定。	毎日	94／11／29
94／11／28 OCA	中国選手11名が大会期間中の検査のBサンプル検査でも全員陽性と判明した。	読売	94／11／29
94／11／28 中国選手団干秘書長	「(検査に関することは) 何も言えないことになっている。(今後の手続については) 最終的にはIOCにいくことになるのではないか。」	読売	94／11／29
94／11／29 新華社通信	「驚きと遺憾を感じ，関係スポーツ協会に速やかに事実を明らかにするように命じた」という中国オリンピック委員会の関係者の談話を紹介。	東京	94／11／30
94／11／29 FINAマークレスキュー事務局	FINA事務局長マークレスキュー「OCAからの正式な通知が届かないと，対応などは検討できない。FINAとしては，その抜き打ち検査	共同 東京	94／11／29 94／11／30
94／11／29 FINAウェルナー専務理事	「薬物使用の事実がはっきりすれば，FINAとしても，中国に経過や背景の報告を求める。」	共同 東京	94／11／29 94／11／30
94／11／29 OCA関係者	陽性が判明した11人のうち，7名が競泳の選手であったが，残り4名の名前も判明。陸上，カヌー，自転車の女子4名。	読売	94／11／30
94／11／29 中国オリンピック委員会魏秘書長	「(黒田は) 検査が終了するまえに事実関係を公表するべきではなかった。OCAの規則では，会長とスポークスマンだけに公表する権限が与えられている。」中国国家運動体育委員会は，各地域の責任者を招集し緊急会議を開いて今後の対策を検討。	時事 産経	94／11／29 94／11／30
94／11／29	中国国家運動体育委員会は，各地域の責任者を招集し緊急会議をひらいて今後の対策を検討。	共同 産経	94／11／29 94／11／30
94／11／29 黒田OCA医事委員長	「検出された薬物は今までにほとんど例を見ないもの。時間がかかったのは，分析上の問題。薬物が特殊なものだったからだ。これを検出できる国は日本を含めて3ケ国しかない。慎重にならざるをえなかった。」	東京	94／11／30
94／11／29 IOCメロード医事委員長	アジア大会の検査で11名の陽性反応が出たことにつき，「薬物使用があったのは明らかだが，OCAが正式な結論を出す前に彼らを“有罪”とするのは誤りだ。IOCのドーピング検査機関は中国の組織的ドーピングを証明したのではない。」	時事 産経	94／11／29 94／12／1
94／11／30 ドイツ水泳連盟	1995年1月の北京でのワールドカップをボイコットする意向を表明。関係者「我々は薬物の巣のようなイベントにはかかわりたくない。」	共同 産経	94／11／30 94／12／1
94／11／30 北京青年報	Yang Aihuaが，日本での検査結果が二転三転したことに疑問を提示する不服申立書をFINAに提出したと報じる。「日本人が計画的に？」という論評の中で，中国選手の違反が確定すれば日本のメダル数が増えることにつき言及する。	共同 産経	94／11／30 94／12／1
94／12／1 中国外務省スポークスマン	アジア大会での薬物検査で11名の中国選手から禁止薬物に反応が出たことについて「これは少数の，または個人の行為というべきである。禁止薬物使用に反対する中国の立場は一貫している。」選手の成果は「選手とコーチが長期に及ぶ科学的かつ苦しい練習の成果だ。」	読売	94／12／2

年　月　日 発　言　者	要　　約	出　典	日　付
94／12／1 中国体育関係者	「中国スポーツ界での禁止薬物使用は，各競技団体や地方組織レベルの判断で広範囲にわたって行われている。」	読売	94／12／2
94／12／1 FINAマークレスキュー事務局長	「Yang Aihuaからの不服申立は，まだない。」	共同 読売	94／12／1 94／12／2
94／12／2 FINAウェルナー専務理事	FINAの抜き打ち検査で2人目の陽性反応者がいることを表明。選手名は明らかにせず。また，中国の「組織的」ドーピングの疑いについて「組織的かどうかは今のところまだわからない。この違反の背後に連盟がかかわっていれば，連盟自体にも処分を下す。」	ロイター 朝日	94／12／2 94／12／4
94／12／3 FINA医事委員会キャメロン事務局長	FINAは抜き打ち検査の回数を増やすとともに，罰則を強化することを検討。「処分期間は4年が妥当と考え，IOCの医事委員などに相談中だ。」	朝日	94／12／4
94／12／4 OCA	アジア大会での11人の中国選手の薬物使用を正式に認め，氏名を公表。メダルを剥奪。検出された薬物がジヒドロテストステロンであることを発表。中国オリンピック委員会の魏秘書長に，内部調査を続けることを求めた。	朝日	94／12／4
94／12／4 中国オリンピック委員会	新華社通信に声明を発表（94／12／4)。ドーピングが「ごく少数の個人行為」としながらも，「深刻な事件」とうけとめ，事態究明グループを組織するとともに，再発防止措置を指示したとしている。違反が発覚した選手1名と関係者を厳しく処分したと述べている。	朝日	94／12／5
94／12／4 アジア大会組織委員会伊藤事務長	「残念の一言に尽きる。せっかく42の国と地域が平和の地・広島に集って心暖まる交流を繰り広げたのに…職員一同必死で頑張り，成功にこぎつけたと思ったのに，わずか一ケ月半後にこんなことになるのは残念でならない。」	読売	94／12／4
94／12／4 FINA医事委員会キャメロン事務局長	アジア大会の検査で陽性となった7人の競泳選手の処分につき，「FINAの規定に従い2年間の出場資格停止処分となるだろう。FINA本部がOCAの声明を確認次第行う。」	読売	94／12／5
94／12／4 FINA医事委員会キャメロン事務局長	FINAの抜き打ち検査でYangに続き陽性と判明した選手については「すでにBサンプル検査も終了した。本部に報告が届き次第公式発表を行う」とした。なお，この2人目の選手は，関係者によると呂選手。	読売	94／12／5
94／12／5 呂淋選手	「私は絶対に薬物を使っていない。注射はもちろん，薬を飲んだこともなく，まったく身に覚えがない。宿舎では食事や飲み物の管理が徹底している。」今後の活動については「現在は自分自身の公明正大さを信じて気分を変えるように努めている。」と明るく話した。	共同	94／12／5
94／12／5 中国オリンピック委員会の委員	「科学的数値が出ているのだから薬物使用はまちがいないだろう。（個人的見解として）17才の選手本人が知っているわけがない。コーチに責任があるとしか考えようがない。有名になろうとするコーチが多い。そういう人達が使っていたとしても不思議ではない。」	共同	94／12／5
94／12／5 黒田OCA医事委員長	クエートでのOCA会議から帰国，会見。DHTが検出されたことを明らかにした。「基準値を大幅に超えたものだけを陽性としたが，グレーゾーンはほかにもいた。」違反摘発選手は「これで最後」と明言。	東京	94／12／6

年　月　日 発　言　者	要　　約	出　典	日　付
94／12／5 黒田OCA医事委員長	「(DHTについては) 私も今回までよく知らなかった物質。注目されていない物質を使うのだから相当研究している人がいるのだろう。」	東京	94／12／6
94／12／5 黒田OCA医事委員長	日本におけるドーピングに関する中立機関につき「反ドーピングのためにも早急に創設すべきだ。(日本の現状は) 非常に遅れている。(IOCの) 反ドーピング憲章にも違反している。われわれは中立機関の創設を具体的に呼び掛けているのに，一向に進まない。」	東京	94／12／6
94／12／5 中国国家体育運動委員会邵世偉報道課長	中国選手のドーピングについて「医師などの役員が関与していたのは明らか。選手に加えて役員も処罰される。」	AFP時事 毎日	94／12／5 94／12／6
94／12／5 中国水泳協会原事務局次長	「一両日中に陽性反応が出た11人を含む関係者に処分が下されるだろう。処分は非常に高いレベルで決定される。」と国家を挙げてこの問題に対処する姿勢を示唆した。	AFP時事 毎日	94／12／5 94／12／6
94／12／5 FINA（マークレスキュー事務局長）	広島アジア大会の検査でドーピング違反が確定した中国の競泳選手7名に，(OCAからの正式通知待ちの段階としながらも) 2年間の資格停止処分を科す意向を明らかにした。	AP	94／12／5
94／12／6 豪州水泳コーチ協会	ブリスベンでの会合にて，中国代表チームの国際水泳大会参加資格を4年間停止するよう，FINAに要望することを決定した。	ロイター 読売	94／12／6 94／12／7
94／12／6 スウェーデン水泳チームのハンス・クルナック監督	中国選手のドーピング違反確定について「我々の疑いが正しかったことが証明され，非常に嬉しい。」	AP 朝日	94／12／6 94／12／7
94／12／6 スウェーデン水泳チームのハンス・クルナック監督	「大量発覚は，中国のドーピングが組織的に行われた証拠である」とくりかえし，FINAに対して，中国の連盟やコーチにも制裁を科すように求めた。「中国の完全な潔白が証明されるまで，自分の選手を中国の選手と同じ大会で競わせたくない。他の国のコーチも同じだろう。」	ロイター 朝日	94／12／6 94／12／7
94／12／6 ドイツ水泳チームのラルフ・ベックマン監督	「事件によって水泳界全体が汚染された。ドイツでは大会中以外でも500回以上のドーピング検査を行っている。中国には国内の検査体制にも問題がある。」	ロイター 朝日	94／12／6 94／12／7
94／12／7 中国水泳協会	広島アジア大会の検査でドーピング違反の確定した7選手を2年間の資格停止処分にすることを発表。7名の選手は：呂淋・周官淋・楊愛華（Yang Aihua）・胡浜・態国鳴・張斌・付勇。	AFP時事 毎日	94／12／7 94／12／8
94／12／7 FINA	大会直前（94／9／30）のFINAによる抜き打ち検査で，中国の呂淋がDHTに陽性反応を示したとして2年間の資格停止処分を決定。アジア大会でマークした世界記録（女子200m個人メドレー：2分11秒57）を公認しないことを決定。	朝日	94／12／8
94／12／7 中国ナショナルチームのコーチ	「シカの角や睾丸の漢方薬が陽性反応につながった可能性がある。」呂選手は4年前にナショナルチームに編成されて以来コーチの指示でこの漢方薬を混ぜたスープを飲み始め「よく眠れるようになり体力回復が早く感じた」	共同 東京	94／12／7 94／12／8
94／12／8 中国体育運動委員会徐寅生副主任	組織的ドーピングの疑いについて「根拠のない話だ。中国は国内でも反ドーピングの立場にたっており，きちんと検査もしている。」しかし「(大量違反には) 複雑な問題もある。現在，各関係協会で調査中だ。選手だけでなく，(関係した) コーチが処分を受ける可能性もある。」	産経	94／12／9

年　月　日 発　言　者	要　　約	出　典	日　付
94／12／12 FINA	アジア大会でドーピング違反の確定した中国選手のうち，男子4名，女子1名計5名の選手らに対する中国水泳協会による2年間資格停止の処分を，追認すると発表。さらに事実関係を明らかにするべしとして「こうした関係者が存在する場合，生涯の資格停止処分を科す」と言明。	共同 毎日	94／12／12 94／12／13
94／12／13 中国オリンピック委員会魏紀中秘書長（専務理事）	「多分何人かの役員が関与していると思う。だからわれわれは特別調査委員会を設置した。対象競技団体に事実究明を急がせている。（調査の進展については）選手は薬物使用を避妊している。調査がいつ終わるかはわからない，まだ役員関与の証拠も掴めていない。」	時事 産経	94／12／13 94／12／15
94／12／13 IOCメロード医事委員長	「背景には旧東ドイツの影響がある。（組織的ドーピングの疑いにつき）薬物陽性を摘発したのは水泳，陸上，カヌー，自転車の選手だけだ。もし中国が高いレベルで組織的にドーピングを展開しているのなら，他の競技からも見つかったはずだ。組織的なものではなかったと思う。」	共同 産経	94／12／13 94／12／15
94／12／14 FINA医事委員武藤芳照	中国選手が「薬用ニンジン」を使用していた可能性が高いことを明らかにした。「旧東ドイツのドーピング方式に中国伝統の漢方薬をミックスしていたわけで，確実に医学方面での専門家が存在していたことが推察できる」分析の結果をFINA本部にも報告した。	産経	94／12／15
94／12／17 米副大統領ゴア	（中国を名指しにはせず）「不正の黒幕を放置したままでは，フェアな競技は望めない。選手と同様の，もしくはさらに厳しい制裁措置を，薬物使用に加担したコーチ，トレーナー，役員に科すべき時期にきた。」（ANOC総会にて）	読売	94／12／19
94／12／20 FINA医事委員武藤芳照	FINAの抜き打ち検査に関する医事報告書・薬物関連資料を公開。漢方薬の人参がDHTの作用を高める効果があることを明らかにした。「DHTなどはレセプターとの結合が増えることで効果が高まる。（人参の）意図的な使用とすれば，相当な知識があったことになる。」	読売	94／12／21
94／12／22 ドニケIOC医事委員	「（ドーピングに対する）処分強化よりも通常のトレーニング期間に行う抜き打ち検査の確度と信用性を高めることが先決。アジア大会の結果は，ドーピングには厳しい規制がなければ組織ぐるみの不正を働くまでに堕落することを示した。」	読売	94／12／23
95／3／2	FINAの会長らが中国でのドーピングの実態を調査するために北京入り。	AP —	95／3／2 95／3／3
95／3／30 FINA理事会	中国選手のドーピングは組織的なものではなかった，と発表。今後も反ドーピングの姿勢を強化し，抜き打ち検査を増加することなどを言明。中国水泳協会による関係コーチへの処分を確認した。	FINAプレス・リリース	

表9　3つのドーピング事件の概要

選手名	数	使用薬物 不正操作	ドーピング事実	薬剤入手経路	投与方法・期間	関係者	主な調査・究明機関	裁判
ベン・ジョンソン	1名	Ⅰスタノゾロール	否定→肯定	解明	解明	医師 コーチ 選手仲間	カナダ政府	なし
		Ⅱテストステロン	否定	不明	不明	不明	なし	なし
カトリン・クラッベ	3名	Ⅰ検体すり替え Ⅱクレンブテロール	否定 肯定	解明	解明	医師 コーチ	ドイツ陸連 国際陸連	ミュンヘン地裁
中国選手	11名	テストステロン ジヒドロテストステロン	否定	不明	不明	不明	中国国家体育運動委員会 国際水連	なし

（福島（太田），武藤，青木）

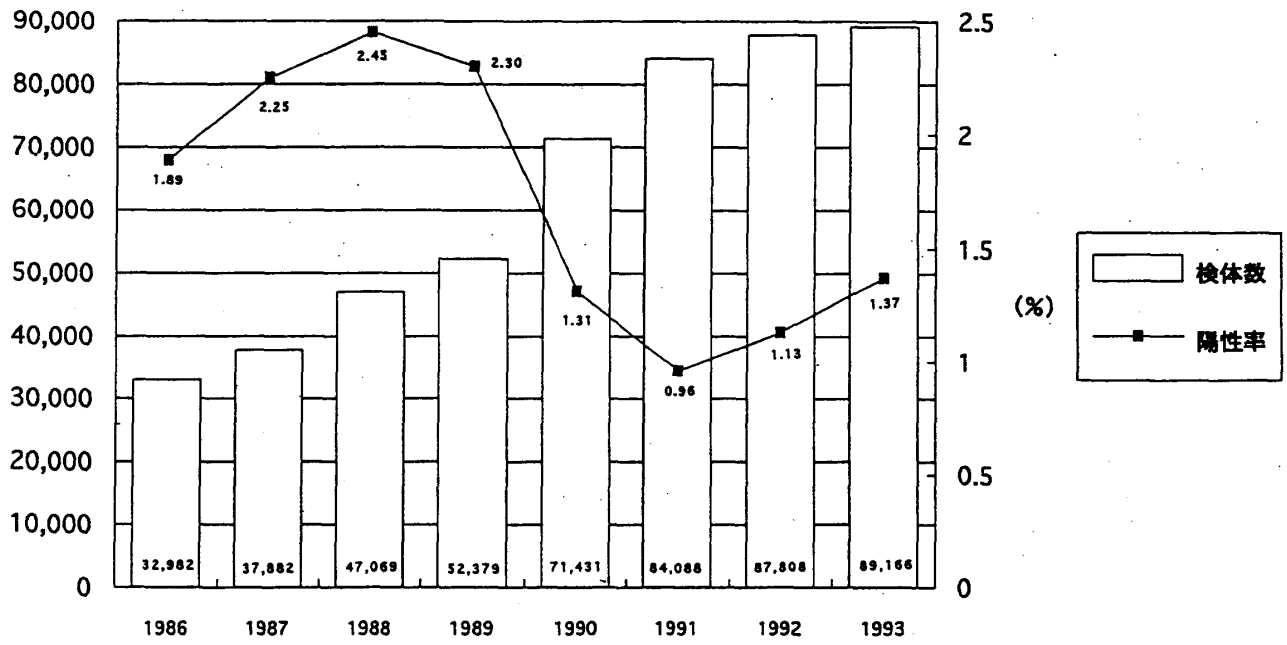

図1　ドーピング検査陽性率の推移
（IOC資料より作成：福島（太田），武藤，青木）

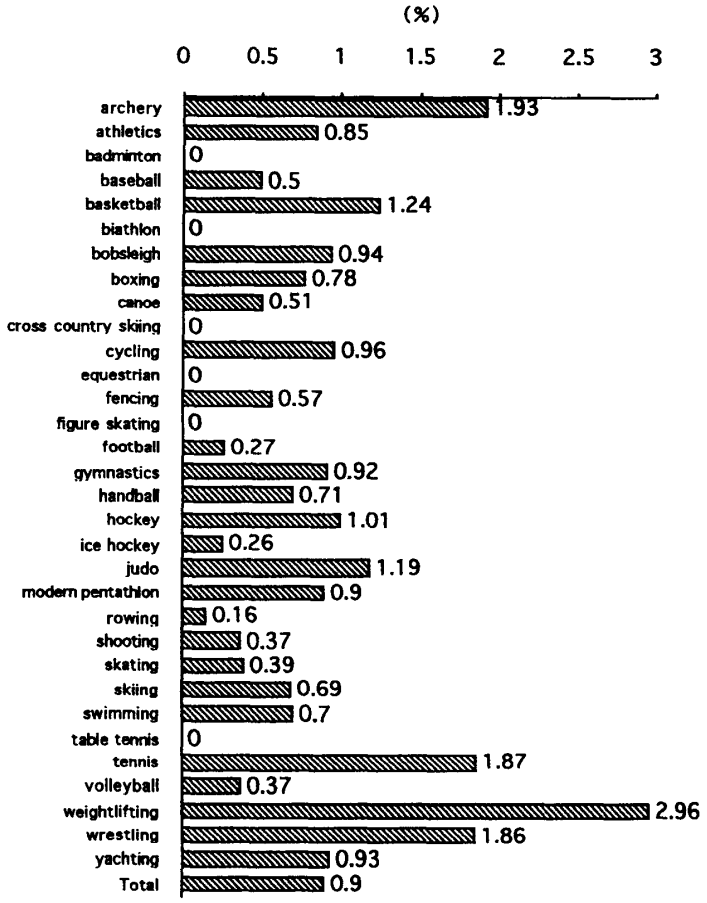

図2　1993年度競技別ドーピング検査陽性率
（IOC資料より作成：福島（太田），武藤，青木）

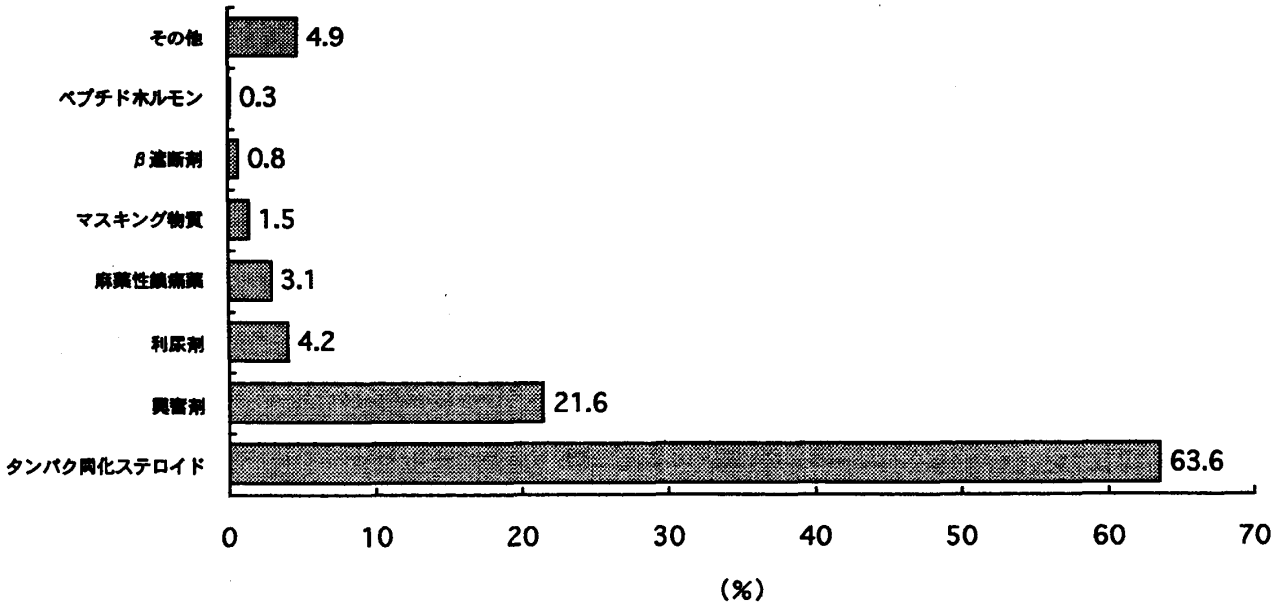

図 3　1993年度検出薬物の内訳
（IOC資料より作成：福島（太田），武藤，青木）

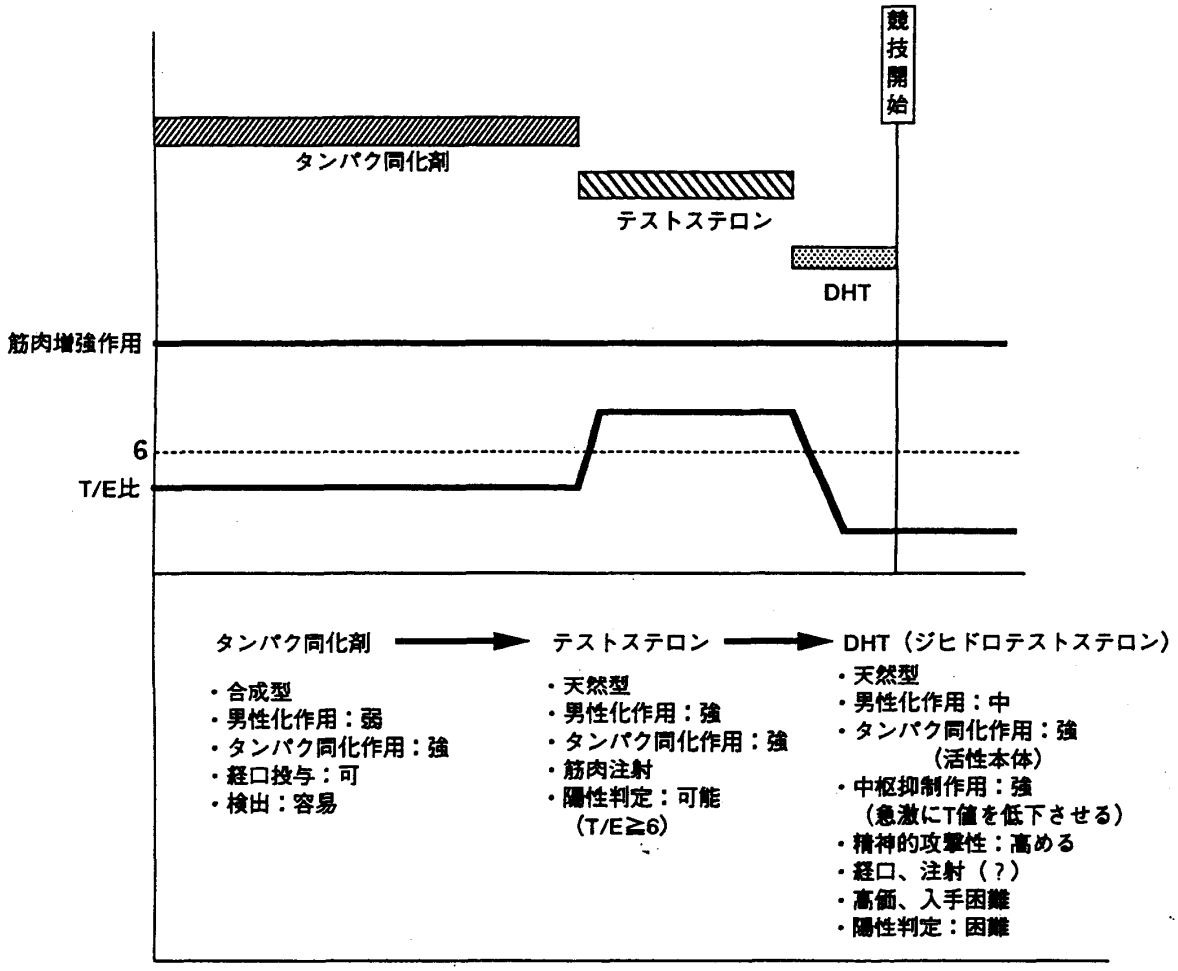

図 4　いわゆる筋肉増強剤の使用計画例
（福島（太田），武藤，青木）